魔立学園・パンデモ

DAMUDO

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公は弱小

「当たり前だろ。周りはみんな魔物だぜ？」

主人公の目付きは怖い

「気にしてんだよ！言うな！」

主人公は母親に自分のゼリー取られていじける、心の小さい奴

「んなことはない。人のを勝手に取る奴が悪い」

やめてって言わないの？

「……うちの家族……化物ばっかなんだ。なにされるか、想像するだけで吐きそうだ」

……大変ですね

「なれたよ。そのお陰で俺も色々経験できたし」

主人公は異世界の学校に転校する

「あの母親の気まぐれで強制的にな！」

最後、主人公は名前がない

「あるわ！……え、あるよな？」

そんな物語

目　次

転校生 ―― 1
ストレス溜まってきた今日この頃。（まだ初日） ―― 5
・・・お前も俺が怖いか？ ―― 14
おお、神よぉ！寝ているのですか！ ―― 23
アニキにはリーダーとなってもらうッス！ ―― 33
だから何の茶番ですか!!? ―― 42
台無しだよチクショウ ―― 54
希望が……見えてきた ―― 65
だったら自信満々に宣言すんな！ ―― 73
……変 ―― 88
今の俺に必要なのはエロスじゃなくて癒しなの ―― 99
嘘は……ありません ―― 107
決闘の火蓋 ―― 117
人間と魔物の戦いは遥か昔から人間が勝つってことを教えてやる ―― 124

転校生

いつからだったっけ……お化けとかを信じなくなったのは。
子ども頃は爺さんや婆さんの昔話を聞いてはお話の中の妖怪の存在信じていた。
夜一人で出歩けないくらい怖がってはいたが、心の底では会ってみたいと思っていた。
神様、妖怪、妖精、魔物などの魑魅魍魎の存在を否定し始めたのは、いつの頃だったからだろうか。
世界にはそんな非現実的要素などない。世界は確定的に存在するものこそが現実で根拠のない迷信や伝説は忘れ去られて消えていくしかない。そう、それが現実。
俺は今までそう思っていて、これからもそれは変わらないと思っていた。何もない当たり前の世界を生きていき、その中で満足のいく人生を送るだけだと思っていた。今までは。
そう《今までは》だ。ある日から、世界の非現実は俺の現実となった。いや、世界そのものが代わったのだ。

「てな訳だからお前ら、転校生と仲良くしろよ。ほら、お前もあいさつしろ」
「・・・」
学校の教室だと分かる場所に俺は居た。今は黒板の前に立たされている。
隣には俺の背中を叩いて自己紹介を促す一人の女性。
体育教師だと言わんばかりに服装は上下共に赤色のジャージ。今どき、こんな先生いねぇよ。
服装だけでも十分特徴的なこの教師には、もっと目立つ特徴があった。
それは額から角が2本生えていることだ。

おかしなことを言っていると思うが事実なんだから仕方がない。
さらに……
「はじめまして。今日転校してきたばかりで、ご迷惑を掛けてしまうと思いますが、え～、よろしくお願いします」
『ヒソヒソガヤガヤ』
俺のあいさつでざわめき出すクラス。
俺が今日から共に過ごすクラスメイトの姿も混沌としていた。
耳が長いエルフッ娘。肌が体毛で見えなくて頭蓋も獣の狼男。ぷるぷると震えながらキラキラとした目を向けてくるスライム。なんか、エロい目で俺を見ながら舌舐めずりしている野獣野郎。……最後のは見なかった事にしよう。
まさにモンスターハウス（教室版）だった。
あはははは、俺食べられるのかなタスケテー。
「さあ、転校生。ここからお前の新たな学校生活が始まる。しっかりエンジョイしろよ！」
「・・・はい」
はい、じゃないよ！なんで俺は平常運転でいられるの？ここはどこ？私はだあれ？ぐらいのことは言ってみせろよ俺！驚きと不安で一杯のはずなのにこれと言った行動がないのは何故ですか!?まるで、体と心が切り離れてるみたいで気持ち悪いぜまったく。
本当になんで周りに化け物ばっか？本当にモンスターハウス？
ぶっちゃけこんな現実認めたくない。認めたくないが、ここまでドンッと見せられたら何も言えない。しかも、なんでか知らんがここで過ごさなきゃいけないことになってるし。
あ～あ、俺卒業まで生きていられるかな～。
……はぁ、取りあえず今日を生き残ることを第一に考えることにしよう。生きていれば、なんとかなるだろ。
「あっ、俺の席どこでｓ「せんせーい！転校生の席、私の隣で良いですかー？」「じゃあ、そこで」わっふ～い……」
今日から自分にとって唯一の聖域になる自分の席を場所を聞こうとしたら、途中で元気のよい声に割り込まれた。

お陰で変な独り言を言ってしまったよ、わっふ～いって……。
俺が聞きたかった質問の答えが出たからいいが、人の会話に割り込みとは感心せんな。席に移動しようか。
「ほら転校生、早く行けよ」
ジャージ先生にまた背中を叩かれた。
急かさなくても今行こうとしてましたから！あと、叩くのやめて！貴女に叩かれるの凄く痛いんですよ！
痛みを紛らわす様に背中を擦りながら重い足取りで自分の席まで向かう。
席までの道のりで浴びせられる、色んな視線を浴びせられて、風穴が空きそうなくらい居心地が悪いです。
そんな地獄道の先にある目的地の席にたどり着き腰を下ろすと、隣の席の子が話しかけてきた。
さっきの割り込みしてきた子だ。隣だったのか。
「よろしく～転校生君♪」
「よろしく」
「私ね！私ね！ココアって言うの！」
「ＯＫ，ココア。取りあえず声のボリューム下げようか」
「あっごめん」
騒がしいけど、聞き分けの良い素直な子のようだ。
この子は……猫娘かな？
猫耳と尻尾、八重歯あるし……それっぽいな。
黒髪だし黒猫の猫娘かな。
「ん？なんでジロジロ見てるの？」
「お前は猫娘か？妖怪の？」
「妖怪？違うよ」
「違うの？じゃあ何？」
「獣人だよ。猫の」
「獣人？なにそれ」
「亜人種の一種だよ。ゴブリンとかエルフみたいなものだよ」
「へ、へえ……」

なるほど。俺が思っている認識と違う所があったりするのか。発言には気を付けよう。
俺から話しかけたのが嬉しかったのか、ココアはご機嫌オーラ全開で質問してきた。
「転校生君は人間なんだよね？」
「まあね」
「ふふッ♪よろしくね！」
俺は適当に答えたが、それでもココアは楽しそうに笑った。その笑顔を見ていると、これからの不安が忘れられるようなきがして、俺も楽しく過ごせるんじゃないかと思えてきた。なんだか妙にすんなりとこの現実を受け入れられる気がする。
席でゆったりして自分の気持ちを落ち着かせる。窓際から2番目の最後列だ。割と良い席なんじゃないか。
こうして俺の新たな学園生活が始まった。
「ふふ……じっくり見れば中々の体つきだ。顔も可愛くて好みだ」
ココアの席とは反対側の席の方向から、熱い視線と身の毛もよだつセリフが飛んでくる。
ああ、始まるのか……これ。
ん？……やっぱり、こんな所おかしいよね!?

ストレス溜まってきた今日この頃。（まだ初日）

ハァ……ハァ……と、ねっとりとして耳に残る荒い呼吸が聞こえる。

・・・ここはどこ!?何で俺、ここにいんの!?

さっきまで流れるように、転校生だよ～♪みたいな感じで振る舞っていたけど、心と体が離れ離れなっているような感覚があって自分の意思で行動しているようには思えなかった。

まるで、催眠術や洗脳とかで操られた感じだ。不快感しかない。

色々とツッコミたいが、今は我慢。取り合えず、俺の現在状況から整理しようか。

俺は一般高校生。自分ではそう思ってる。

家族構成にもこれと言った特徴が有るわけではない。両親健在、妹一人といたって平凡。

俺以外の家族は平凡とは言い難いがそれは置いとこう。

次……なんでここにいるかだが。

落ち着いて、げんざいにと思い返してみようと試みる。

確か……普通にいつも通りの生活リズムで、一日を過ごしていて、家に帰ったら久しぶりに親父が帰ってきていて、・・・リビングに向かったら、急に母さんが鈍器で襲いかかってきて、その時に後頭部に一撃貰ったことまでは覚えてる。……そっから先は……ダメだ、覚えてない。気付いたら自己紹介を促された感じだ。

そして、ここはどこだ!?学校の様だが明らかに異様でしかない。

と言う訳で何がおかしいかまとめてみた。

①クラスメイト

これは此処に来てからずぅーーーッと思ってる。まずね、人間らしい人間が居ないの……。いや、人形を成してはいるんだけど、毛むくじゃらだったり、鱗があったり、エラがあったり、目の数や手足の数が2対じゃなかったりして明らかに人間じゃない！ＺＩ☆Ｎ☆ＧＡ☆Ｉなんだよこれが！しかも、生徒だけじゃなくて教師もなんだよ。

あと、男女の比もおかしい。１：９ぐらい男子が少ない。しかもホ

モっぽい！しかもホモ!!大事な事なので（ｒｙ
それと服装もおかしい。制服じゃなくて私服なんだろうけど。やけに露出度が高い物を着てる奴が多い。
如何にもファンタジーなビキニアーマーとか布を身体に巻いてるだけとか着物やローブ。なぜかスク水にメイド服。
自由過ぎる！コスプレ喫茶よりもレパートリーに充実していて、目線を移す度に二度見してしまう。目が泳ぐなんてレベルじゃないよ！個人メドレーレベルだよ！
でも、悪くない。本当にありがとうございます！
それに年齢。絶体バラバラだよね。皆は見たことある？不良っぽい狼男とロリッ娘悪魔が隣同士で私語している授業風景なんて。俺は今見てる。
②授業
今、現在進行形で授業を行っているんだが……。
科目名『魔法理論・実技』ってなんだよコノヤロー!!
魔法なんてファンタチック便利機能は俺の常識にはなかったぞ！学校の必須科目に連ねる程こっちの世界では常識なのかぁ!?いらないよそんな常識！
この世界不適合者の俺に魔法なんてもんが使えるわけがないから、授業内容もちんぷんかんぷんだ。
幸いこの学校にも魔法を使えない脳筋さんもいる様なので知識があれば問題ないらしい。後でわかったことだ。
……でも本音を言うなら、魔法使いたい。だから真面目に授業を受けてみた。
せめてメラみたいなの使いたいじゃない。ねぇ？
とまあ、色々あるけど深く考えず過ごしますよ。
気持ちの切り替えと言いますか……感情のコントロールは得意なんです。その内慣れると思うし。
早くこの現実に馴染もうと、俺の頭にエールを送っていると授業はどんどん進んでいった。
まだねっとりとした熱い視線が飛んでくるヤダー。

授業、全部終わりました。
生徒がほとんど帰って行った教室で、担任のモノホン鬼教師、バキ先生から学生寮の説明を受けていた。
先生、なんかメンドクセーって顔に書いてある。そんな露骨に嫌な顔されるとなんだか……目覚めそうだ。
それでも理解できるまでしっかりと説明してくれる辺り、悪い人（鬼）ではないらしい。こういう面倒見の良さげな姐御肌の教師って好きだな。
「以上のことを守っていれば特に問題にはならないから。わかったか？」
「はい、御丁寧にどうもありがとうございます」
「面倒だけど私はあんたの担任だからね。これ、あんたの部屋の鍵。んじゃ頑張ってね～」
バキ先生は片手を怠そうに振りながら教室から出ていった。
いい人みたいだからあまり迷惑かけたくないな。俺は先生の背中見てそう思った。
さて、早速部屋に行きますか。番号は……９２４か。苦痛死。
やけに語呂がメガティブだなははは！
きっと深い意味はないと思おう。４２７とか４４４とか６６６よりは良かったと考えるんだ俺！頑張れ俺！
そんな些細なことにも敏感になるぐらいの精神重症の中、重い足取りで寮へと向かった。
寮の入り口には魔方陣がいくつもあり、その魔方陣一つ一つの近くに立札があった。その立札には数字が書いてある。
きっと部屋番号だろう。そう理解した俺は自分の番号の立札がある魔方陣を探した。
お、あったあった。９００～１０００か。これでやっと自分のプライベートタイムだ。ここまで来る途中、生徒にすれ違う度に好機や軽

蔑の色をした目線を向けられた。……目覚めそうだ。
中には俺を餌と見てる奴やクラスのあいつとは別の……あっち趣味の奴が熱い目を向けてきた……ここの男子ってあんなのばっかなのぉ!??
ここに馴染むとか言ったけど訂正ね、訂正。無理だわ、あんな気味の悪い奴に見られながら過ごすとか馴染める訳ないわ～ってか馴染みたくないわ!!
あーもう！やだ！
「キィィィィィィィィィィ!!」
『ッ!!?』
色んな感情が込み上げてきて、ヒステリックな奇声をあげると周りにいた生徒が驚きこっち見てくる。
どうしたんだよこいつ。みたいな周りの空気なんてなかったかの様に俺は魔方陣を踏んだ。
一瞬、光に包まれてなにも見えなくなったかと思ったら、光が薄れて視界が晴れていき、見慣れない通路に出た。
スゲー！魔方陣スゲー!!テレポートできたよ本当に！
俺の魔法への好奇心は一気に高まった。
そんなわくわくした気持ちで自分の部屋を探して歩く。
……見つけた、９２４番室。では……オープン!!
・
・・
・・・
俺は家に帰りたかった。元の世界にある自分の家に。
自由と祭りが好きな迷惑の権化である母親。
ふらっと消えてふらっと現れる、何でも知ってる父親。
そんな二人の自由奔放ぶりを受け継ぎ、天性の怪力を授かった最凶災悪娘の妹。
そんな家族の絶望的な家事能力の穴を埋めるために家事能力にスキルポイント極振りした一般高校生の俺。
四人家族で過ごした日々。

色々とストレスが溜まりに溜まる生活だったけど、こうやって会えなくなってしまうのは凄く寂しい。
みんな何してるかな？
母さんは全裸でＢＬＤＶＤでも見てるんだろうか？
親父は今頃どこに向かってるのやら……前はアトランティス探してくるとか言って出てったからな～。
マイシスターも部活頑張ってるかな～。
そういや冷蔵庫のゼリーはどうなったかな？母さんか妹に食べられているだろな。きっと家の中は悲惨なことになってるだろう、掃除をすればゴミを増やす連中しか居ない訳だし。
俺は現在の家の状況を想像しながら思いを馳せる。
ああ、家に帰りたい。
なんて気持ちが心の隅には確かにあったが今はない！
だって仕方ないよ！こんな素晴らしい一室が今日から俺のプライベートゾーンになると思ったらそんな気持ちはスカッと消えてしまいますよ。
一人暮らしには十分過ぎる部屋の広さ、むしろ少し大きいぐらい。
おしゃんてぃーなキッチンも自由に使え、風呂もトイレも別々で付いており、そこら辺の高級マンションの一室より設備が良い。
これからこの一室を自分のスタイルに模様替え出来ると思うとウキウキとワクワクで胸が高鳴る。たぶん今日寝れないかも！
部屋には必要最低限の物しかないため、カスタムも自由自在。
さあどうしようか、ふふふ♪
一人、にやけながら改装プランを考えながら部屋を眺めていると部屋の隅に段ボールがいくつか積まれているのに気が付いた。
「なんだ？……こ、これは！」
部屋の隅から引っ張り出した段ボールを開けてみると、中には俺の私物の数々とメモ書きがあった。
私物を確認する前にメモに目を通してみるとそこには母さんの字で殴り書きされていた。
『こっちは心配すんな、がんばれ少年！

あと、冷蔵庫のゼリーは食べといたから安心しな！』
「……ふざけんな……クソババア」
メモには一言の激励と盗み食いの暴露が書かれていた。
ただそれだけなのに不思議と目頭が熱くなる。
あんなのでも母親だ、凄く心配してくれてるんだろう。
そう思うとなんだか胸の辺りがキューッてなった。
さっきは帰りたくないとか言ってたけど訂正。やっぱり家族は欠け換えのない宝物だと再認識させられた。
少し涙ぐんできたが頑張れと言ってくれた母親のために、いちいち泣いてはいられないと思った俺は荷物確認の作業へ戻ろうとする。
その時、俺は紙の裏側にも何か書いてあるのに気が付いた。
『ＰＳ．もし、どうしても寂しくなった時は一番長い段ボールの中の物を使いなさい』
まさかここまで優しい母親だったとは！
俺の中での母さんの好感度が上がっていった。
母上様、号泣モノです。
それでは早速、ちょっと見てみましょうか。
別にもう寂しくなったとかじゃないよ。一体中身はなんでしょうか!?って言う好奇心で動いてるだけである。
だってあの人が一人暮らしを始める息子に贈り物だ。気にならない方が嘘だぜ！
段ボールの山から目的の物を探す。母さんのやることにわくわくしたのは、本当に何年ぶりだろう？
「お！これだこれ。さあ、封印解除！解き放たれよ!!」
ちょっとおかしなテンションで段ボールのテープを剥がし、ふたを開ける。
中には白い生地の抱き枕が三個入っていた。それも両面に絵がプリントされているやつ。
取り出して絵をよくみると。
「・・・」
自分の家族の写真がプリントされていた。ただ、その絵が問題だ。

表に下着姿で飛び込めと言わんばかりに両腕を広げている絵。
裏には生まれたままの姿で手足を使い大事な部分を隠している絵。
「・・・・・・・・・キッゥ」
俺は暫く家族の醜態がプリントされた抱き枕を眺めることしかできなかった。

「さ～て、何を作ろうかな～。簡単に炒飯作るか」
俺は明らかに周りの世界観とは場違いの冷蔵庫から材料を取り出す。
なんでもこの世界に冷蔵庫はないらしい。かわりに簡単な貯蔵庫を使っているみたいだ。
そんなことより、さっさと胃袋に炒飯を詰めよう。でないと死ぬ。
まだ一度も使われた形跡が無い綺麗なキッチンに立ち、段ボールの中にあった調理器具で料理を始める。
＊コンコン＊
鍋で米を炊き始める。
鍋を使って米を炊くのはかなり難しいが出来ないことはない。では何故俺はそれができるか？
実は一回、妹の暴徒で電化製品がおじゃんになった事件があり、電気に一切頼らない生活をこなしたことがあるのだ。
それ以来、原始的な生活の知恵を幾つか覚えた。
あの時は本当に辛かった。だって一番困るの俺よ？
他は家事しないから全部俺がなんとかしなきゃいけないからね。しかも、「テレビが見れないから暇だ～」とか、「暇だから部活の練習手伝ってよお兄ちゃん♪」とか、俺の要望も言えないまま振り回されていた。
やっぱ、普通じゃない生活してたよなぁ～、とつくづく思う。・・・お腹痛くなってきた。
＊コンコン＊
そうそう。あの抱き枕は段ボールに戻して、ロープで厳重に巻いておいた。俺式の封印術だ。

処理方法は、取りあえずゴミの日に棄てます。
何事もなかったかの様に棄てる。
そう、俺は何も見なかったし知らない。
ただ段ボールごとゴミを棄てるだけ。いいね？
……実際キツいよあれ。
一番キツいのは親父プリント抱き枕まであることだぜ？
母さんと妹はアホだから仕方ないけど、なんで親父まで!?
なんで脱いで写真撮られてるんだよ！
なんでノリノリでベットに倒れこんでんだよ!!
やっといてなんで頬染めてんだよ!!!
気持ち悪いんだよぉ!!
＊ドンドン＊
・・・さっきから聞こえてきたノックの音が強くなった。
ずっと聞こえてきたので気になってはいたが、あえて無視してた。
だって、開けたら面倒臭そうだったから……。
＊ドンドンドンドントン……トン……＊
ヤバイ！ドアの向こう側の気力が下がってきて音が弱々しくなってきた！さすがに無視し過ぎたか!?
もし泣いていたら洒落にならん！転校初日に他の生徒泣かす鬼畜転校生とか変なイメージが付いてしまう前に早くドアを開けなければ!!
＊ガチャ＊
「はいすみません！手が離せなくて！」
「フシャアアアアアアアアアアアアア！」
＊ヒュンッガリッブシュッ＊
「ぎゃあああああああああああああ!!!
血がああああああああああああいあ!!!」
「うにゃあああああああああああああ!!!」
ドアを開けたら急に爪が振り下ろされて血が顔から噴き出すとかもう……なんなんですかぁ。
理不尽への怒りと傷の痛みのダブルパンチに、今までに発したこと

のない絶叫が俺の口からマーライオンの水よろしく学園寮中に鳴り響いた。

明日はきっと今日より距離を置かれるんだろうな。

イテーよチクショー、胃もイテーよチクショー。

・・・お前も俺が怖いか？

「ごめんね転校生君。痛いよね……」
「いや、俺がノックを無視してたのが悪いんだから謝らなくて良いよ」
「でも顔の傷が……」
「もう痛くない」
「でも「痛くない。いいね？」……ハイ」
ドアの向こう側にいたのは、隣の席になった黒髪ショートの猫耳少女、ココアだった。
つまり俺はこの子に爪で顔面をサクッブバシャアアされた訳だ。
まあ、痛かった。痛かったが悪いのはこの子のノックを無視した俺なので怒る気はない。謝罪もしてくれたしね。
むしろ、顔面の激痛により発した叫びのお陰で気分が少しスッキリした。
てな感じで俺は気にしてないんだが……ココアがショボ～ンとしている。
不謹慎ながら、ぶっちゃけ可愛くて抱き締めたい。でも我慢だ。
この子の見た目が中学生ぐらいだもの。そんなことしたら犯罪者になってしまうからな。
しかし、どうしたものか……。何とか元気になってもらいたいんだが。
「あの～ココア、ちゃん？」
「ッ!?!!」
ビクッと反応すると尻尾と耳がピンッと立ち、背筋も見事なまでに真っ直ぐになった。
そんなに驚くか!?まるで、彼氏の親にビビる恋人じゃないか！
「そうビビるな。顔の怪我なら気にしなくていい、これぐらいなら直ぐに治る」
「でも……」
「安心しろ、俺は顔を引っ掻かれた程度じゃ怒らねーよ。むしろこれくらいなら俺の日常ではレベルの低い痛みだ。お前、母さんお手製の

ベアクローを知ってるか？石に穴が空くんだぜ？それで引っ掻かれた俺が猫娘の爪ぐらいで、ＨＡＨＡＨＡ♪」
「……本当に怒ってない？」
「さっきからそう言ってるだろ？あんまりしつこいと怒るぞ？ガオぉ～ッ！」
分からず屋の猫ちゃんに両手を立てて猛獣のポーズで威嚇。
「……プッ、ふふふ♪ごめん、わかった。……ありがとう、ね♪」
少し柔らかくなった表情で笑った後、顔をちょっと紅くして照れてるようにお礼のを言ったココア。
俺の真剣？な姿勢は一気に夏場のアイスの如く溶けていった。
ココアの天使のような笑顔を見ていると、俺の頬の筋肉が自然と上がり笑顔になってしまう。
嬉し過ぎてニヤニヤと悶えるあれだ。
こう言う時の笑みは人様に見せられるようなものじゃない。
「わかってくれればいいんだ。そうだ！折角来たんだから飯でも食ってけよ」
顔を見られまいとさっさと台所に向かう。
我ながら、素晴らしく自然に流れを変えたな。
「いいの!?やったー、いっただきまーす♪」
「はい喜んで」
俺はお皿を一枚追加し、出来立て炒飯を盛り付けた。

「美味しい！なにこれ!?凄く美味しいよ♪」
「炒飯だよ。知らねえの？」
「ちゃーはん？知らないけど、これ好き♪」
「そりゃ良かった。食いたくなったら何時でも来いよ。作ってやるから」
「うん、ありがとう！」
飯を食いながらココアと話し込んだ。
ココアの話を聞けば聞くだけ此処が俺のいた世界ではないという事実を思い知った。

いつかは受け入れなきゃいけないし。丁度よかったと思う。
この世界には炒飯以外にも、俺がいた世界の料理はほとんど存在しなかった。
他にも電化製品などの器械類も数える程しかないし、暮らしの必需品も未知の形をしている物が代わりに使われているらしい。
そんな異文化中の異文化で際立つのが『魔法』だ。
この世界に器械が少ないのは、その利便性を魔法が一役買っているからだ。さらに、生活の根本部分にも魔法が根強く関わっているらしい。
水道水は地下から魔法で汲み上げて、それを魔法でろ過し使えるようにしたり、魔法で灯りを作り夜の街を照らしているらしい。
また、生活以外のことにも役立っている。特に戦闘で大いに役立っているとのこと。そりゃそうだろ。
火や水の魔法とかで敵を薙ぎ倒し、魔力で強化した武器を振るうんだそうだ。
俺もここに住む以上使えるようになりたい。かなり切実に。
この学園は『パンデモ』と言う名前で、戦闘の基礎から実習、幅広い専門知識を学べる場所であり、ここらの地域で一番大きい建物だそうだ。
あと、学園長の姿を見た者が少なく七不思議の一つになっているらしい。
昔は人間が通っていたらしいが、魔物の突然変異（擬人化）が起きた少し後にゴタゴタがあって、今じゃ魔物が通う学園となってしまったみたいだ。
そうそう、ココアの話によると俺以外にも人間が学園に居るらしい！是非ともお目に掛かりたいものだ!!
学園の近くに『グラディス』と言う街があるそうだ。
そこでは人間と魔物が一緒に暮らし、文化を築いているらしい。
その話を聞いて俺は安堵の気持ちを覚えた。たぶん、この世界にも人間が沢山いる事実が嬉しかったんだろう。
そのうち、休みを取って街に行ってみたいと計画してみる。

この世界は思ったよりも複雑な事情を抱えているみたいだ。
昔は人間の驚異だった魔物も、最近あった魔王の世代交代により新任した魔王が人間好きらしく、魔物の遺伝子を変えて現在の人形となったらしい。
生態もかなり人間寄りらしいから安心していいみたいだ。
でも、人間らしいってことは何かの拍子で『問題』を起こしてしまうってことだ。面倒事は勘弁してほしい。
そして、魔物の代わりとなって現れたのが『禍獣』だ。
前魔王時代の頃の魔物よりは数が少なく、発見件数もあまり無いが、そのぶん獰猛で凶悪だそうだ。
雑魚でもそれなりに覚悟しないと一瞬の隙に命を取られてしまうらしい。
怖い。出来れば会いたくないな。
こんな感じにココアからこの世界のことを色々と教えてもらった。
「で、転校生君は何処から来たの？此処の事、何にも知らないから凄く気になってたんだ。あと、料理が美味しい」
「日本って島国の真ん中らへんの県から。って、最後のが本音か？」
「にっぽん？けん？なにそれ美味しいの？」
「お前はらぺ娘キャラなのか！そればっかりじゃねーか！」
次からココアが来るときは覚悟した方がいいな。
「んじゃ、転校生君は何でここに来たの？」
「何でって言われても……あれ？なんでだろう？。強制的に転校手続きされた感じだし」
「え!?じゃあ何も考えずに入ってきたの!?どうやって!?」
「え？普通に転校するだけでいいんじゃないの？」
「いやっ、ここは魔法が使えないと人間の入学なんて無理だよ!!」
「・・・え？じゃあなんで俺居るの？」
「・・・ぅ」
「・・・う？」
「・・・ぅっ、ううッ、うわぁ……」
この後、泣きじゃくり始めたココアをあやすはめになった。

どうしてこうなった？
「スゥ～、スゥ～ｚｚＺ」
黒猫一匹、俺のベットを占領して熟睡しております。
たまに足を組んだりともじもじして、非常に艶かしい。
しかし、俺は紳士だ。こんなガキ臭い猫娘に良からぬことするほど女に飢えてないから安心しろ！
俺が魔法も使えないのに此処に転校したことを聞いたあと……ココアが謎泣きをした。
どうやらさっきの話は聞いては行けないタブーだと思ったらしい。
大丈夫、気にしてない。たぶん、母さんのせいだろうし。無茶苦茶なのは慣れてる。
「しかしなぁ～どうしよう。この状況」
欲を言うなら早く寝たい。
今日は色々と有りすぎて頭が痛いから寝て、脳を休ませたい。整理させたい。だいたい、もう夜中だし。
しかし、ベットは無邪気な寝顔の猫娘が占領している。
辛うじて人一人分のスペースは有るものの……そこに収まって寝ようなんて考えはない。
可愛い娘と添い寝できるチャンスだが、そんなこと考える余裕がなかった。
しょうがない。地べたで寝るか。
そうと決まれば早速押し入れから……寝袋を取り出して寝るか。
「よいっしょ……。ふぅ……」
ミノムシ。
寝袋で寝ている人を見たときの感想は大体がミノムシだ。
でも本物は顔だけ出すと言うバカ丸出しな格好じゃないからな。
親父がアウトドア趣味の人で、家族一人一人がマイチェアとマイ寝袋を持っている。
このことに関しては素直に感謝しよう。抱き枕の件も忘れてやる。

あぁ、睡魔が襲ってきた。
寝袋って妙に興奮しちゃって中々寝付けないもんだが今回は……ぐっす……りと……。

俺の家
「ハハハ♪くらえバカ息子ぉ！……タワーブリッジ!!」
母さんは某超人マスクマンの必殺技を叫びがら俺を掴み掛かってきた。
母さんに持ち上げられ、仰向けで首と足を抑えられた状態で肩に乗せられた。
そのまま、母さんは両手を下げていく。
俺の首と足が引っ張られ、逆海老ぞりの如くぅ……は、腹が裂ける！千切れて見せられないような物が飛び出るぅぅぅ!!
「し、死ぬるぅ～～ッ！や、やめれぇ～～～!!!」
「ふっふっふっ、さあ次で止めだ!!カモン、リトルモンスター!!」
筋肉と骨が鳴らす変な音で奏でる狂想曲が体の芯まで響く中、耳に不吉な単語が聞こえた。
『止め』『リトルモンスター』この二つの単語から導き出される答えは……あいつだ!!
「呼ばれて飛び出せ！」
意味がわからん言葉と共に足音が聞こえてくる。
妹！来るなマジで！
「とおっ！」
妹は空高く飛び上がり前回転する。
＊ギュウィイイイイイイン＊
音がおかしい。普通は空中で回転（この時点でおかしい）した時の音はグルグルだろ？
今聞こえる音は電動鋸のあれと一緒。というか、妹が電動鋸にしか見えない。
それでは皆さんおたっしゃで。

「くぅらえぇ!!」
高速回転している妹はそのまま母さんに担がれている俺の真ん中、つまりは腹部目掛けて飛んできて。
「必殺!!万国踵砕きィ!!」
＊グシャ＊
超遠心力により極限にまで高められた踵落としが腹部に命中した。同時に……不快……な、お……とが……。

「人殺しィ!……あれ?」
窓に掛かっているカーテンの隙間から太陽の光が差し込み、俺に朝だと知らせる。同時にさっきの出来事は夢であることを認識できた。
しかし、腹に来た衝撃は本物だった。一体何が……こいつか。
「クゥ〜、クゥ〜」
寝息を立てているココアが毛布にくるまった状態で俺にダイブしていた。これが原因か。
昨日、こいつが泊まっていったんだったな。
幸せそうな寝顔見ながら思い出す。今思えば、女の子と一つ屋根の下で寝るってのは不味かったよな。
でも昨日はそんなこと考えてる余裕なかったし大丈夫だろ。
さて、ココアには悪いが幸せ状態から帰って来てもらうぜ。
俺は上半身を起こして両手を毛布猫娘の下に差し込む。
そのまま上に放り上げる!
「どっせいっ!」
＊クルクルクルドンッ＊
「ミギャ!」
「あッ」
上空へと投げられたココアは綺麗な放物線を描き＋切りもみしながら地面に顔面から落っこちた。すごく痛そう。
……ヤバいどうやって謝ろう。

俺は動かないココアが憤怒の形相で起き上がるまで無意味な謝罪の言葉を考えていた。

「・・・」
「・・・」
「・・・ごめん」
「・・・別に。私もやり過ぎた」
俺は相変わらず人間の姿が一人も見えない廊下を顔に引っ掻き傷を過剰装飾して歩いていた。
隣にはこの装飾を施してくれた引っ掻き傷専門のメイク師、ココアさんが並んで歩いております。
さっきまでかなりの喧嘩してたから気まずい。
少しは空気も柔らかくなったが……まだなぁ。
朝食をとるために学園の食堂へと向かっています。毎回炊事は俺も嫌だ。
ココアの話じゃ、かなり広い場所らしい。料理の数も多くてセルフサービス法式らしい。
目が輝くほど楽しそうな話なんだが、なんだか今日は胃が重いし体が怠い。たがら、朝食は軽めにしたい。
しかしまあ……
＊ジィ～～～＊
「ウワッイルヨイルヨ！」「ナンダカコワイネ」「チッ」「ウホッイイオトコ」
沢山の視線をビンッビンッに感じる。どんだけ俺に興味津々なんですか皆さん。
人気者になってるのは嬉しいけど聞こえてくる言葉は全く嬉しくない。特に最後の。
ある程度の悪口は親父に連れていかれたどっかの国でなれた。でも最後のは無理だ。
「ご、ごめんね。皆悪気がある訳じゃないんだよ。ただ人間が怖いん

だよ」
「お前が謝る必要ないだろ。怖いって……強さは俺よりお前らの方が上だろ？」
「まあ、そうなんだけど……」
「・・・お前も俺が怖いか？」
「全ッ然♪」
「……そりゃ良かった」
この子は本当に良い子だ。最初の友達がこいつで良かった。
気付けば俺は少し顔を上げて歩けていた。

「・・・スゲェ」
食堂に入った時、俺の暗い気持ちが嘘のように消えた。
広さ、清潔さ、設備どれをとっても素晴らしく。その場所で食事をする者達も皆いい顔をしている。
ここは俺にとって、心のオアシスになる。そんな予感がしたとき。
「あッ！人間だーーー!!」
『ッ!!』
一人の女子生徒に見つかった。
続いて食堂の生徒達にも気付かれた。
さっきまで楽しそうな会話は聞こえなくなり、ただ俺に視線が集まるだけであった。
「……う、グスッ……うぇぁ、ごめんなさい」
「ッ！転校生君泣かないで！謝らないで！」
俺、ここキライ。

おお、神よお！寝ているのですか！

＊モシャスモシャス＊

食堂の隅にある一つのテーブルで俺は一人、サラダを食べていた。ちなみに中身はキャベツ、にんじん、きゅうり、マッシュポテト、サラダ菜である。ドレッシングは……何だろうか？俺の知らない物であったが味は気に入った。

しかし、一人で食べる食事が本当に美味しいものだろうか？否！大人数で食卓囲んで食べた方が絶対にうまい。

なら、なんで俺は一人隅で食べているかって？ココアはどうしたと？答えましょう。

実はあの空気を作り出したあと取り合えず腹も減っていたので料理を取りに行って食べようとしたんだ。

「このトレイに好きなものを乗せていけばいいんだよ。欲しいものがあれば厨房の人に言えば出してもらえるよ」

「・・・そか」

「あ、えと……な、なに食べる？私のオススメは魚の塩焼きだよ♪」

「いや、重いものはちょっと……」

「じゃ、じゃあパンとかサラダにする？クロワッサンがオススメだよ！」

「……ならクロワッサン貰おうか」

「うん、どうぞどうぞ！」

この時の俺は馬鹿だった。

嫌われてる事実なんて今更だと開き直って落ち込んでなけりゃよかったんだよ。

元気出して、迅速に行動すれば【彼女】に会うことはなかった。

「あれ？ココアじゃん」

「にゃ？あ、カロンちゃん！」

ココアに声をかけたのは『カロンちゃん』と呼ばれた骨……の装飾品を着けている褐色肌で白髪の女の子だった。背丈はココア同じくらいで顔からわんぱくっぽさがうかがえた。服装がスポブラに腰の

布巻と装飾品。……ここの生徒は子どもまで露出趣味なのか？
「ん？ああ、お前が噂の人間か……。ココア、ほらさっさと行くぞ」
「え？ちょっと、転校生君が」
「あんな変な奴ほっときゃいいんだよ。あ、あそこ空いてる♪」
行ってしまった。
何か一言、「待って」とでも言えば違う展開になっていたかもしれなかったのに、俺は無言で成り行きを見守るという、この上なくダサい行動を取った。どんだけ落ち込んでひねくれてるんだ！
過去に戻ることが出来るなら、この俺に母さん直伝のスクリューブローをぶちこみたい。
「・・・おばちゃん、青汁ある？」
「……あるよ」
「あるんだ」
年期の入った顔のおばちゃんに活をいれる意味で青汁を頼んだらあるとのこと。
何も出来なかった自分への罰として青汁をトレイに運んだ。
とまあ、こんな感じだ。
青汁はかなり苦かった。が癖になった。何杯でもいけそうだ。
俺の知らない苦味がしたからこの世界特有の植物でも使ったんだろう。
なんだろう？薬草かな？
＊モシャスモシャスモシャスモシャス＊
あ～、顎がよく動くな～。
サラダを一心不乱に食べるという謎の努力の後、クロワッサンをちぎって一口サイズにし、口に運ぶ。うん、うまい。パンのフワフワ食感と甘さが俺の荒れた心を優しく癒す。
心に染みる味ってのはこの事を言うんだな。
青汁を一口飲み、クロワッサンを運ぶ。たまにはサラダをモシャモシャしてトレイの料理を食べていく。
食事に何気無い幸せを久しぶりに感じ取れた気がした。
「すまないが、邪魔させて貰う」

＊ドンッ！＊
あはは、幸せぶっ壊されたよ♪
テーブルの向かいの席に着た誰かが食べ物てんこ盛りのトレイを豪快に置いた。
乗っているのは肉、肉、肉、申し訳程度のパン。見るだけで胸焼けが起きそうだ。
俺の小さな幸せの箱庭に食事テロ（食欲が失せる意味で）を行う不届き者は誰だ。
相手の顔を見るために首を少し上に上げていく。
今の俺の顔は不機嫌なので、子どもが泣き出すぐらい苛立ちを隠せない顔になってるだろうがどうでもいい。
むしろこいつが泣いてくれれば俺は嬉しい。
トレイの肉が邪魔で見えない下半身。
かなり実っている胸部。どうやら女子の様だ。
が、かなり鍛えられた筋肉がチラチラと確認できる。肌は軽く日焼けしていてちょっと黒い。
顔は……
「うわっ！キミ、怖い顔をしているな！」
顔を確認すれば必然的に目と目が合ってしまうが、初対面の俺に失礼なこと言う奴だな。
……でも貴女も充分顔が怖いです。
頭部から突き出ている短めのねじれ角。歴戦の勇士の付けてそうな切り傷の痕。そして、睨んだだけで人を殺せそうな、いやビームが出そうな眼。しかも三つ。
うわーめちゃつよそー
なんで!?なんでなんで!?どうしてこんな伝説の英雄みたいな人が俺と同席しようとしてるの!?
あれか!?俺を討伐にきた勇者様ですか？
ごめんなさい！俺はなにもしてませんごめんなさい！
「座って大丈夫だったかい？」
「ッ!?ふぁい！とうぞ！」

「悪いね♪」
断ったら殺されるんじゃないかという恐怖が強制的にｙｅｓの返答を口から絞り出していた。
「いただきます、へへっ♪」
俺の気も知らずに美味しそうに肉を頬ぼる彼女。
口に入れ咀嚼するたびに味に惚け幸せそうな表情をする。ちょっとカワイイ。
＊モシャモシャ＊
気の紛らしと、サラダを食べる。……鮮度が落ちたか。
どうしようか逃げようか？いや、下手にここから離れればこの人に不快な思いにさせてしまう可能性がある。それだけはダメだ。……そもそもこの人はそんなに怖い人か？幸せそうに肉を貪る姿はココアに近い臭いがするし。
頭に浮かんできた疑問による好奇心で顔を少し上げる。
目に映っているのは半分くらいになった肉の山をペースを落とさず食べる彼女の幸せそうな顔だった。
……ちょっと怖い顔してるけどホントはイイ人なんじゃ……よしっ！何事も行動だ！
「あ、あの～」
「ん？なんだい？」
食事の手を止め俺を見る彼女。
普通に付いている二つの目と天○飯のように、おでこにある一つの目、合計3つ目の視線が俺へと集まる様はやっぱり　怖い。目付きも怖い。饅頭怖い。
「アッ、自己紹介がまだだったね。私の名前はライラ・ネオルド、ライでいいよ」
「いや、聞きたいこと違うんですけど」
「え！違ったの!?ご、ゴメン！他人と話すの久しぶりだったから……うわ～やっちゃった～恥ずかしな～／／／」
「・・・」
訂正

この子メッチャかわいい。
え？なに？なんでこんなに赤くなってるの？なに？コミュニケーションは常識ですよみたいな話し方だったのに人と話すの久しぶりなの？俺と一緒で友達すくないの？
顔に似合わず恥ずかしがって、もうッギャップ萌ってやつで俺を萌え殺す気なのか!!?
……しかし、他人と話すのは久しぶりかぁ……なるほどね。
「あれかな？あんまり友達……いなかったりしたりして……」
「あまりどころか全然いないんだ。顔が怖いからって誰も近付いてこないんだよ」
「だろうな」
「ッ!!や、やっぱり怖いんだ！」
自分で言っといて他人に言われると傷付いた。
絶望に満ちた青い顔を自分の両手でペタペタと触る。
そうとうなショックを受けたようで口を開けたまま喋らない。
「えと、だ、大丈夫だから。個性だから。気にしなくてもいいと思うよ」
「……ほ、本当？」
開きっぱだった口が動き、不安な声色で俺に問いかけた。
実際、なんの根拠もないのに『大丈夫』と言ってしまったわけだ。今更訂正するわけにもいかない、押し通そう。
「ああ、本当だ。俺が転校する前にいた学校にも同じ様なコンプレックス抱えている奴がいたが優しい奴でな。友達も沢山いた人気者だったぞ（嘘）」
「へーそうなんだ……私もそうなれるかな？」
「勿論だとも。だからあんまり気にするなよ、な？」
「うん、ありがとう」
多少の罪悪感が俺を襲う。
許せ神よ、一人の少女を笑顔にする嘘だ。
「……じゃあ、君が最初の友達になってくれる？」
「……うっ、ううぅ、グスッ、こんなクズでよければぁああ！」

「え!?なになに!?大丈夫、痛いの？何で泣いてるの!?」
神よありがとう。
俺は食堂で2回目の涙を流し、目の前の少女と友達となった。

食堂で飯を食べ終えた俺は授業が始まるギリギリの時間までライラと他愛のない話をして別れた。
クラスは別々なのが残念だが、寮の部屋番号が近いことが判明。近いうちに遊びに来るとのこと。
その時は俺の手料理ご馳走してやるつもりだ。肉が好きらしいから肉料理であることは決定だな。
聞いた話じゃライラはエルフとガイアドラゴンのハーフらしい。スゲー両親ですね。
額の第三の目は何故か付いてたらしい。亜種とかなんとか。この目のお陰で顔の迫力に更なる拍手が掛かっているから、強面と一緒に額の目もコンプレックスらしい。
さて、教室向かいますか。
教室に着いた俺は相変わらずな視線を浴びながら自分の席へと着いた。
先に着いていたお隣のココアが食堂のことを謝ってきたがココアが悪いわけじゃないので許す。少しは俺も悪いからね。だだしカロンちゃん、テメーは許さん。
ココアに聞いたらカロンちゃんとライラは同じクラスらしいので、ライラに懲らしめてもらおうとか思った自分がいた。ライラ滅茶苦茶強そうだし。
授業は淡々と進んでいく。
自分の中にある眠っている魔力は瞑想すると目覚めることがあるらしい。帰ったらやってみよう。
ルーン文字とか言うのがチンプンカンプンで眠ってしまった。担当の魔女ッ娘先生に軽い電気ショックで起こされた。

鍵の掛かった箱のピッキングの授業。なんかわからんが言われた通りにやったら簡単に開いた。それが一番に開けちゃったもんだから担当の忍装束着た先生にスゴく誉められた。弟子にならないかと聞かれたので考えておきますと答えた。

そんなこんなで最後の授業は外で生態調査だそうだ。

……グループ行動が原則だって。

はっきり言います。ぼっちのグループ学習は拷問です。他の皆が楽しそうに活動してるのに自分だけ輪に入れず、自分の存在理由を永遠に考えるしかできないからだ。

ふざけるなよコノヤロー！

なんて絶望している間にクラスの奴等は次々とグループを作っていく。もちろん俺に声をかける人はおらず、唯一の希望、ココアちゃんもどっか行っちゃった♪

……やべ、どうしよう。

「おーい、転校生」

「ん？ああ、バキ先生ですか。なんかようですか？」

「ああ、コイツらの班が一人足らないんもんで、入って欲しいんだ。ちびっこばっかだし、お前みたいな男が入れば安心だからな」

「まあ、そう言うことなら……何処にも入ってませんし」

「よし、おーいお前たちこっちこーい！」

バキ先生の呼び掛けでぞろぞろと三人の……幼女が現れた。

一人目は不健康そうな紫っぽい肌をした暗ガール。

二人目はゴーグルを頭に着けている橙色のツインテール幼女。

三人目は黒髪ショートの八重歯が光るボーイッシュガール。

一人目と三人目は小学6年生ぐらいの背丈なのに、二人目がどう見ても幼稚園児です。

なんだよこれ……俺を犯罪者にしたいわけですか？そうですか。

「んじゃ、転校生。よろしく頼むぞ。お前らも転校生のサポートしてやれよ」

「……わかった」「まかせなよ♪」「・・・」

おい三人目、返事して。

若干カオスなチームが結成され、学園近くの海辺の森の生態調査を行うことになりました。

「ほい♪そんなわけで転校生との親睦を深めるために自己紹介したいと思いまーッす！」

森の中をさ迷いながら生態調査をしていると園児が唐突に騒ぎ始めた。

とりあえず止まってやるが調査のレポートを書くのは止めない。

なんだろこの草？

「まず私から。おっほん、私の名前はニーナ・コメット。学園の天才科学者のドワーフとは私のことさ♪さあ、この勢いのまま次ッ！」

「……ホロン・ハートレス。……種族、リッチ」

「イエーイ♪締めはこの子、どうぞ！」

「・・・」

「な……なんか喋れやぁ!!私がどんな思いでこの場を盛り上げようとしてんのかわかってのか、このいぬっころが！」

「ッ！だ、誰がいぬっころだ！僕は人間が嫌いだから口をきかないだけだ！」

「……また、始まった」

なんだこれ……俺はどうすればいい。

まず、ニーナとか言う園児に呼び止められ時間を使って始めたのが喧嘩。

とりあえず俺は悪くない。

しかし、人間が嫌い、か。正面から言われたのは初めてかな。

……心に刺さるな。

まあ、そんなことは置いといて、この場をなんとか治めなきゃな

……先生に任されたし。

「おい二人とも喧嘩はやめろって！」

「「うるさい！」」

「お？」
あれ？ちょっとお兄さんカチンと来ちゃったよ。
嫌々、俺はお兄さんだ。このぐらいでキレちゃって手を出す様な人間じゃない。ＯＫ？
「うるさいのはぎゃーぎゃー騒いでるお前たちだろうが。ほら、さっさとやめろって」
「あ、ダメ……」
ホロンの声など聞こえず二人の間に割って入ろうとし、体を押し込めるように前に出た。
「「邪魔だって言ってるだろ!!」
＊メキョ＊＊ゴリッ＊
二人の拳が俺の体にめり込み、変な音を響く。
酷い激痛が電気信号となり全身を駆け巡る。
後ろへ弾き飛ばされる中で頭に浮かんだ言葉は、
「ヨウジョサイキョウ」
だった。
＊ドシンッ＊
そのまま地面に倒れこむ。
……ふっ☆き☆れ☆た♪
「大丈夫？」
ホロンの声を二度目の無視。
ムクッと立ち上がったその顔に表情は無かった。
「……大丈夫だね」
何が大丈夫なのか。知ったこっちゃないのでそのまま前進する。
目的地は……俺を吹き飛ばした二人。
「うぬぬぬっ！」「ガルゥウウッ！」
取っ組み合いをしている二人に狙いを定め……加速ッ！
一気に間合いを詰め二人の服の襟元を掴んで投げる！慈悲はない。
「おおっ!?」「うわっ！」
＊ゴチンッ＊
二人は空中でくるりと回り、頭をぶつける。

必殺・小鬼投げ（母命名）
妹との死闘で生み出した必殺技をここで使うことになるとは……。
本当は両手で壁に向かって頭から投げ当てる技なんだが、今回は対象が二人で壁なんて無かったから互いにぶつける結果となった。相手が軽いならこれはこれでアリだな。
……アリじゃねーよ！なにやってんだ俺は！
女の子相手になにムキになってんの!?
「おい二人とも大丈夫か!?うわっタンコブ出来てる！」
「お兄さん……グッジョブ♪」
「グッジョブじゃないからね!?」
ホロンが口元に手を添えながら、反対の手で親指を立てる。
初めて感情のこもった声を発したが今はそれにツッコメない！
ゴメンねホロン、後で一杯ツッコムから！
「二人とも！起きろぉ!!」
ぐったりと倒れている二人の近くで叫ぶ。
本当に悪いことをした。どんな償いでもするからこの二人を助けてください！
「おお、神よぉ！寝ているのですか！」
「耳元で五月蠅いわ！」
「ガアアアア！」
倒れていたはずの二人が叫びながら目覚めたと思ったら今度は俺が地面へと倒れることになるのは、この後すぐのこと。
……あれ？この終わりかた……デジャブ？

アニキにはリーダーとなってもらうッス！

森の中で一人の男が二人の正座をしている少女の前に立っているのが姿があった。近くでは紫のローブ着た少女が周りを見渡しながら紙に何かを書いていた。

「・・・」

「おい」

「はい……」

「お前ら二人……俺に言うことあるよな？」

「ん～どうだったかな？」「べ、別に……」

「成る程、飽くまで認めない気か。ならこれを見ろ」

俺は少し下がり服を脱ぐ。

別に犯罪紛いのことやるつもりは無いから安心しろ。

俺の体には大きな痣が二つできていた。

「わかるよな、ええ？言い逃れできん確かな証拠だよ、証拠」

体のずいずいと二人に押し付けるように見せ付ける。付けるのタブルパンチで威力は2倍だ（なりません）

「・・・う、うぅすぅ、すみませんでした!!」

遂にドワーフ幼女、ニーナが折れた。

彼女は大きな声で謝ると、これまた大きな声でわんわんと泣き始めた。

……まずい、泣かれてしまった。

しかし、状況が状況であるからして……もう一人の名前すら教えてくれないこの子が謝るまで威厳を崩すわけにはいけない。……よしっ。

俺は泣いているニーナを抱いてあやす。

頭を撫でて背中をポンポンと優しく叩く。

昔、小さかった妹をこうやってあやしていたのを思い出したな。

「ニーナは偉いなー、ちゃんと謝ることができて」

「うぅ……ほ、ホント？」

「本当本当。偉い偉い」

「え、えへへ♪／／／」
よし、取り敢えずニーナは何とかなったな。次は……
「悪いことしたら謝るのは当たり前ことだもんな。当たり前のことを出来るってのはとっても偉いことだよー。逆に当たり前ことができない人は残念な人だよねー？」
わざとらしく聞こえるように喋る。
犬っころは少し反応をしたのか気まずそうに目をそらす。
ん？いつの間にか黒い耳と黒い尻尾が生えてる。本当に犬っ娘なんだ。
「・・・」
取り敢えず反応を待つ。
ニーナ軽いなー。
「・・・ぅ」
手が小刻みに震えてきた。
……もうちょっと押してみるか。
俺は彼女と目線を会わせるよう体制を低くする。
「ちゃんと謝れば怒らないから、ほら、言ってごらん」
「……ん、ご、ご、ごめん……なさい……」
遂に犬っころが謝った。
キタッ！勝った！第５話、完!!

になるはずもない。
しかし、俺は勝った！この犬っころに謝罪の言葉を言わせたぜ！

フーハッハッハッ！もう我は満足である！
さあ、もう一人の勝者であるこの犬っころにも称賛の言葉を。
俺はこれまた泣き出しそうになっている犬っころの頭を撫でくり回す。
たまに耳を優しく撫でてやると、目を細めて気持ち良さそうな顔をする。
うはっｗマジワンちゃんｗ
「よーしよしよし、偉いぞ偉いぞ♪」
更にスピードアップ！
わしゃわしゃと撫でに撫でると、尻尾もブンブン振り始めた。
ヤバイッ楽しい！
「うおーッ！このこの♪かわいいヤツめ♪」
「う～～～～ん♪」
【しばらくして】
「・・・／／／」
「……あの、ご、ごめんな。調子にのり過ぎた」
「いやッ、僕は別に……嫌じゃ、なかったし。むしろ気持ちよかった／／／」
「え？今なんつった？」
「な、なんにも！……お兄さんなら人間でも信用してやっていいかなって思っただけ」
「え？いいの？」
「うん……／／／」
顔はそっぽ向いてるのにめっちゃ顔真っ赤にしてる。これは……
「デレたな」
「デレたね～」
「デレ……デレ」
ほうほう、ニーナやホロンにもわかったか。
「……お兄さんって大和之国出身ですか？」
「え？大和之国？違うよ、アイム、フロム、ニッポン」
「へー、聞いたことない国ですね。僕は大和之国出身なんです。名は

遥、狼の獣人です」
　やっと名前教えてくれたよ。遥ね、獣人ってことはココアと一緒か……同じクラスだし仲良しかな？
「遥、かわいい名前じゃないか」
「え!?か、かわいいって!?」
「え、なに嫌だった？」
「はいっ！僕、男ですよ！かわいいって言われて喜ぶわけないじゃないですか！」
「お前男なの!?」
「え!?なんですか！僕のこと女の子とでも思ってたんですか!?」
「……う、うん」
『・・・』
　空気が一気に重くなった。
　どうしよう俺のせいだよな……。
「……渡風遥、大和之国出身、好きな食べ物は肉料理、好きな人はお姉ちゃん、悩みは……女の子に間違われやすいこと」
　ホロン、素晴らしいぐらいの情報流出です。本当にありがとうございます。
　なるほど、悩みね。
「……大丈夫だよ、個性だよ個性」
「で、でも……嫌なことは嫌なんです」
「そうか……なら俺に任せろ。要は男らしくなれればいいんだろ？それなら協力してやるよ」
「ッ！本当ですか！」
「任せろ」
　ははははぁ、やっちゃったよ。その場の勢いで安請け合いしちゃったよ。
　特に考えもなしにこの場を修めようとしたらダメだね♪
　……仕方ない。今更断れん、よしッ！やるぞ！
「あの～、そろそろ集合時間だけど……どうすんの？」
「え？」

ニーナの言葉の意味を理解できない。
・・・いや、できました。授業の課題をやってません。自己紹介とか謝罪の強要とかで時間を思いっきり忘れていた。
ヤバイ、少ししかやってないぞ！バキ先生に怒られるとか無事で済むのか？鬼だもんね、怒ったら鬼神とかになるのか？あはは♪やべー♪
「……レポートなら……私、書いた」
絶望に染まった俺の心をこの子は浄化した。
彼女が持っている紙には一面びっしりと字が書いてあり、パッと見ただけで課題の最低量を遥かに越えていた。
「ホロン……お前……ッ！」
バッと移動し、ガッと抱き上げ……
「よくやったよお前！流石だぜよ！」
誉めながらグルグル回転する。
昔、母親にこうやって褒められた。
「お、おぉ……おお……！」
ホロンも何気に楽しんでくれてるみたいで良かった。
結局、何がしたかったのかわからないまま自己紹介の件は終わった。
しかし、コイツらが楽しい奴等だっててことは、今回のことで嫌でも理解した。
それにしても友人が一気に増えたな。良いことではあるが、うまくやっていけるか心配だよまったく。
でも、楽しくなりそうだ。
「よしっ！さっさと帰って俺の奢りで食堂でも行くか！」
俺は三人に背を向け、顔だけは振り返り親指を立てて飯に誘う。
無性にコイツらと仲を深めたい、今はそう言う気分だった。
「え！マジで？！良いの？！」
最初に飛び付いてきたニーナ。目をキラキラ輝かせて此方をみている表情から凄まじい期待を感じてしまう。
まあ、これぐらい喜んでくれた方が奢る方も気分がいいけどな。

「何でも好きなもん食わせてやるから、さっさと行くぞ！」
「ヤッター！アニキ大好き♪」
「え？アニキ？」
今、確かにニーナの口からアニキと言う、妹が兄を呼ぶ数多くの名称の一つが発せられたが気のせいか？
「にぃ……私、食堂特製日替わりパフェがいいな……」
ホロンちゃん。君には借りがあるけど、然り気無く食堂のメニューの中でもトップクラスに高いの選びますね、ははっ。……てか、今にいって呼んだか？
「お兄さん、こっちですよ！早くいきましょう！」
「・・・お前はお兄さんで決定なんだ」
「え!?」
何だか少し残念だがまあ、いいか。
「よしっ！俺に続け！」
「「おおーーー!!」」
俺は森の出口へと走りだし、俺に続いて三人の仲間達も俺の後を追うように走り出した。

場所は変わって食堂。
俺は三人を連れて食堂で夕食タイム。お財布がかなり痩せてしまったが……
「ん～～～うまいうまい♪」
「あま……あまぁ……♪」
「ハフッハフッ、んっく、……ぷはっあぁ！」
本当に幸せそうに食事しているコイツらを見ているとどうでもよくなった。……本当だよ？
そういやいい忘れてたけど、こっちの世界の通貨は【マエン】って言って、円と基準は一緒だ。
母さんがこっちに送ってきた荷物の中にあった財布にはそれなり

に入っていたのでここ数日はそれで過ごすことになるな。
ん？なんで母さん、こっちの世界の事情わかってるの？
よくよく考えれば母さんが俺をこっちに飛ばしたってことは、母さんはここととあっちを行き来できる術を持っているってことだよな……。てことは母さんは……
「ちょいアニキィィ！」
「ふぁ！」
考え込んでいたらニーナに呼び戻された。
急に大きな声で叫ぶから、なに考えてた忘れちゃったよ、ちくしょう。
「話ちゃんと聞かなきゃダメだよ～、特に私達みたいにかわいい娘の前では特にね！」
「僕は可愛いとかはちょっと……」
「？……私、カワイイ？」
「お前らチームワークって知ってるか？」
何だか凸凹している娘達ですけどいいんでしょうか？お兄さんは心配です。
そんな自由っぷりに苦笑しながら俺はコップを手に取り口を付ける。うん、青汁まずい。
「そんなことよりアニキ、私達はこうして三人組から四人組へとクラスアップしたわけだよ！ここで一つ、格好いいチーム名考えようと提案であります！」
「口調が安定してないな、ニーナ」
「それが私の生き方ッス！」
「なるほど、安定しないギャンブル人生と言う訳か……ん？四人組って俺も入ってるの!?」
「え？そうッスよ……お、後輩口調いいッスな。これからこれで統一しようかな？」
ニーナが安定性に目覚めた発言なんかどうでもいいが、俺がコイツらの仲間って認識になっているかが気になる。
取り敢えず話し合いだ。クールになるためのブルースープ……う

ん、不味い。
「いや俺は変なチームに入れてもらっても困るだけだからいいよ。必要な時だけ登場する同盟者みたいな扱いでいいよ」
「その辺なら大丈夫ッスよ。このチームに足りないものはズバリッ私達をまとめあげるリーダーッス!!」
リーダーが必要＋俺がチーム入り＝あ、察し
俺の頭のなかで嫌な式が成り立ってしまった。……まさかな……そんなわけないよ、うん。
俺がリーダーやるとか、そんなことにはなら……
「アニキにはリーダーとなってもらうッス！」
「やっぱりかぁあああああああああああ！」
頭の中では必死にそうでないこと祈っていたのに心ではそうなることをわかっていた。
どうしよ、諦めるしかないの？泣き寝入りしかないの？あぁ、また胃が痛い。
よし、諦めるなら最後まで足掻こう。そうしましょう。
俺は落ち着くために青汁を（以下略
「そうは言うがニーナ、他の二人には了承を得ているのか？」
「僕はお兄さんがリーダーだと嬉しいです。一応、僕とニーナの喧嘩を止めたっていう実績もあるわけだし……反対する意味なんてないよ」
「……にぃと一緒に居れるから、賛成ぃ……ポッ／／／」
最後の望みも消え失せた。なら、もう……やるしかないじゃないか！
こんなに期待されてるんだもの、これで強引に拒否できる人がいるなら俺にその強さを分けて欲しいよまったく。
三人の気持ちを知った。これでしっかりと答えをだす道しか残されてないわけだ。
やれやれっとため息を吐き、青汁を飲み干す。
口から喉にかけて清々しい苦味が染み渡る。
「……わかった。やるよ、リーダー」

俺は自分の意思を三人に告げる。
「本当ッスか!?」
「ああ」
「やっふぅー♪じゃあじゃあ！早速チーム名決めるッス!!」
「何が……いいかな……♪」
「僕としては格好いいのがいい！」
「時間はたっぷりあるからじっくり考えるッスよ！取り敢えず、色々候補をだすッス！」
食堂の隅っこで、四人の男女が楽しそうにお喋りする姿がかれこれ数時間あったそうだ。

「彼が噂の転校生か……何だか楽しそう」
転校生達が囲んでいるテーブルの場所から少し離れたテーブルで一人の少女は彼等の姿を暇でも潰すように眺めていた。
「滅ぼしてみたい……かな♪」
物騒なことを楽しそうに呟き、クスッと笑う。
彼女はテーブルのコップを手に取り、中のジュースを飲み干した。
「でも、彼のあの服装……私と一緒」
＊コツン＊
ジュースを飲み干した後、一言呟いてコップを置いた。
「もしかしたら……神様が言ってた運命の相手って……」
空のコップに映る彼女の顔はさっきと違った意味を孕んだ笑みを浮かべており、左目には妖しい輝きを放つ模様が浮かんでいた。

だから何の茶番ですか!!?

森の生態系調査の授業があった翌日である今日。
休みです。そう、休日です。
「べぇぇぇりぃぃやっほぉおおおおお!!!」
一日の始まりがこれでした。
喜びと言う感情の百鬼夜行が俺の全身を走り回る。
これほどまでに嬉しい休日は2回目である。
一回目は俺を抜いた家族全員が旅行でいなかった休日です。
ここに来て初めて休日、やりたいことが目覚めたばかりの俺の頭にＰＯＮＰＯＮ出てくる。
しかしッ、まだ一日の始まりじゃないか。まずは人間らしいスタートを切ろうじゃないか、なぁ？
俺は軽い足取りで洗面所へ向かい顔を洗う。
次にパパッと服を着替える。因みに俺の寝間着姿はパンツとシャツです。どうでもいっかぁ～♪
着替え終えたら毎日ピッカピッカにしてあるキッチンに向かう。
さて、なに作ろうか？
簡単にフレンチトーストでも作るか……よしっ！
俺は冷蔵庫（元いた世界製）から卵とシロップ、牛乳にバターを取り出す。
手の込んだ物ならもっと材料が必要だが、俺はこれでいい。……やっぱり苺も乗せよう。
あとは、仕舞ってある食パンを取り出して、……さあ、作るか。
まず、ボールに卵を入れ、溶きます。そこに牛乳を入れて混ぜます。
カッカッカッと泡立て器とボールの衝突音がリズムよく鳴る。
そう言えば妹はこの音が好きだったな。
俺が台所でこうやって混ぜてたら突然、妹が帰ってきて「おやつ何ッ!!」って言ってきたな。……その日、妹は他県に遊びに行っていたはずなのに。
そんなことを思い出している間によく混ざった。

そこにパンを入れて、浸します。パンが卵を吸って黄色くなる。
次にフライパンにバターを落として熱して溶かしながら全体に滑らせます。
バターが溶けきり、全体に行き渡ったらパンを……ドーン！
＊ジュウウウ……＊
フライパンに乗せた瞬間にパンから良い音が鳴る。
……そろそろかな？
良い具合の所でひっくり返す。
茶色と黄色の色彩調和が俺の食欲を増幅させる。
＊グゥ～～～＊
腹の虫も鳴き出した。
……よしっ、できた。
両面しっかり焼けたところで皿に盛る。
……苺とシロップだけじゃなぁ……そっか、ホイップクリーム掛けよう。
冷蔵庫から市販で凍って売っているホイップクリームを取り出す。
先っぽをハサミで切って、ぎゅうううっと絞り出す。
凍っているせいで出が悪い。
クソッ誤算だぜ！一度使うと決めたからには妥協したくない！
……溶けるまで置いとくか？嫌、それではフレンチトーストが冷めてしまう。何より、俺の空腹が大暴れしている。
……しゃーない。解凍するか。
俺は鍋に水を入れて火にかける。火力は限界一杯だ。
沸騰するまでちょっとおいとく。……トイレ行こう。
・・・・・・・・・・・
「沸いたかな～？」
おお、良い具合にグツグツ沸騰してるな。
俺は凍っている生クリームを湯気の中へ。
こうやって溶かします。
鍋の中に突っ込むとか思った？そんなことしたら……ご自分の目でお確かめください。

「……俺は誰に言ってんだか」
こうやってボーっとします。

「おお、良い感じになった。これなら……」
俺は早速生クリームをフレンチトーストにニュルニュルとかける。
これに苺を飾り、シロップをかければ……
「完成だ」
特製フレンチトーストの出来上がり。
これを見れば十中八九の人が美味しそう、と言うに違いないできた。
さあ、これから癒しの朝食タイムへと洒落こむぜ！
テーブルに運び、ナイフとフォークを揃える。
コップと牛乳も持っていきこれで完了。
「いただきま＊コンコン＊、おや？誰か来たようだ」
席から離れノックされたドアを開けるためにドアノブへと手を伸ばす。
「はーい、どちら様？」

どうしてこうなった……。
「アニキ！おかわりッス！」
「あっ私も～♪」
「私も……おかわり……♪」

「僕もお願いします！」
ニーナ、ココア、ホロン、遥の順番でフレンチトーストのおかわりを頼まれた。
「もうすぐ出来るから待ってろ！」
『は～い♪』
もうすぐできると聞いてなのか、四人は幸せそうに返事をした。
どうしてこうなった。
俺はただ、美味しい朝御飯を食べようとしていただけなのに、なんで？
あの扉を開けたからだよチクショウ……。
・・・・・・・・・・・
ドアを開けたら、そこにはチャームポイントである黒い猫耳と尻尾をソワソワ動かしながら立っている、笑顔のココアがいた。
どうやら俺を朝食のお誘いに来たらしい。生憎、俺はもう飯を作ってしまっていることを伝えると、ココアは悲しそうに顔をふせてしまった。
見るからにボルテージ駄々下がりだ。それの証拠に、猫耳と尻尾が糸の切れた操り人形の様に力なく垂れ下がっている。
俺は凄まじい罪悪感に教われた。と言うことで俺の部屋で朝食を取ろう提案した所、ピカピカスマイルの二つ返事で了承してくれた。前、ご馳走した炒飯が頭に浮かんだんだろうな、と内心思っていた。
しかし、これで丸く収まることはなかった。
俺を朝食に誘いに来たのはココアだけではなかっのだ。
「アニキ!ご飯誘いに来たッス!」
開きっぱの扉に弾ける笑顔のニーナがいた。
それを追うように、ホロンと遥の二人が現れて……
・・・・・・・・・・・
現在に至ると言うわけだ。
今、振り返ってみると本当にどうすることもできなかったのがわかる。
せめて、選択肢は3つぐらい欲しい。

よくわからないことを考えていたら、フレンチトーストのおかわり分が完成したので、さっさと皿に盛ってやろうとテーブルに行く。
「おお！来たッス来たッス！」
相変わらずテンションがハイのニーナが大きな声で吠える。犬か！
「あんなり吠えんなよ、ニーナ。ほら、おかわりだ」
「イャァァッホオオオオオ！」
皿に盛るなりすぐにがっつくニーナの姿に苦笑しかできない俺がいた。
「私達にもお願いしま～す♪」
ココアに声をかけられて俺は他の皆のところにもおかわりを盛っていく。
みんな、ニーナほどアピールしないが喜んでくれた。
作った側の人間としてはとても嬉しい。そう考えればまあ、こう言うのもアリなのかな？
「さて俺も食うか」
しっかり自分の分を作っておいた俺に抜かりはない。
この騒がしい友達達が囲んでいる騒がしいテーブルでの楽しい朝食タイムへと洒落こもう。
さっさと空いている席に座り手を合わせる。
「いただきます」
俺はフォークとナイフを取り、楽しく話をしながら食事を口に運んだ。

「これすごいッスね！中が冷え冷えッス！」
「あ～、コラコラ。冷蔵庫開けんな！」
「にぃ、これ……どこ？」
「あぁ、それは……本棚の上に置いといて」

「じゃあ、これは？」
「それは……そっちの机に置いといて」
「あの、お兄さん、このグルグル巻きにされている箱は一体……？」
「それは、開けちゃ、ダメ、絶対！」
　食事を終えた後、俺は部屋の整理を四人に頼んだ。
　皆しっかり働いてくれるが……俺の私物が珍しいのか、さっきのニーナ見たいに好奇心のままに動いてしまう時がある。
　まあ、働いてくれるんだから文句は言えないけど。
　そんなこんなで皆の活躍で粗方片付き、ゴミの分別もできた。
「それにしても……アニキの私物は見たことない物ばっかりッスね～」
「それ私も思った！」
　ニーナの疑問にココアから伝染し皆の疑問となった。
「・・・」
『アアデモナイコウデモナイ』
　皆、それぞれの説を挙げては指摘されの話を始めてしまい、俺が空気になった。
　・・・最初っから俺に聞けよ。
「もうわかんないッス!!アニキ！あんたは何者ッスか!?」
「・・・遂にお前たちに話すときがきたか・・・。」
　お遊びでシリアスっぽく話してみる。
「実は俺はこの国の生まれではないことを三人には言ったよな？」
「確かに。……それが……なに？」
「え？どういう……こと？教えてよ！」
「そうだな、ココアも居ることだし最初っから話そうか……」
　俺は気取ったようにポッケに手を入れてゆっくり歩きながら窓の前へ移動する。
　そこに立つと俺の後ろから光が差し、ココア達側から見れば光で俺がよく見えない状態になっている。
「お、お兄さん？皆？」
「俺はこの国からずっと遠くにあるニッポンと言う国から来た。正確

には飛ばされたんだ」
「と、飛ばされたって一体……誰に？」
　俺はココアの質問に、ふっと悪役めきながら誤魔化すように笑った。
「俺の母親にだ」
「ッ！う、嘘でしょ！」
「今明かされる衝撃の真実ってやつッス!!」
「・・・」（驚いて言葉が出ない表情）
　俺の言葉に三人が驚いた。
「これ、なんの茶番ですか？」
　遥くんが何か言ってるようだか俺は知らん。
「悪いが、これが真実だ。俺は自分の母親の手によってこの国に、この学園に強制的に飛ばされてしまったのだ！」
　俺は口を休めることなく話す。俺の全てを、俺の人生を知ってもらうために言葉に気持ちを乗せて俺は伝える。
「俺はこの学園に来て辛かった。何故なら、俺のいた国はここの様に人と魔物が共存する国ではなかったし、何より魔物の存在すら知らなかった。魔物だけじゃない、魔法も文化も全てが俺にとっては未知の存在なんだ！ここに居るのも魔物ばかり、俺をゴミを見るような目で見てくるやつも居る。そんな場所でこれからもずっと、ずっと……くっぅ……ッ！」
　クソッ、視界が霞んでよく目えねーやい……！
「うっ、うぅぅ、私達がもっと心を開いて接して行けばこんなことにはならなかったのに……」
　俺のために泣いてくれるのか？ココア……。
「だから何の茶番ですか!!?」
　遥が大きな声で何か言っている。
　もしかして！俺のために怒ってくれるのか？
「だから、あの校外活動の時、海の向こうを悲しそうな顔で睨みながら、「いつか必ず……！」って呟いてたんスね……」
「お兄さん、そんなこと言って無かったよね!?」

「だから……にぃは私の……体を……ぽっ♪／／／」
「今の話から何処をどう切り取ればそう言う感想になるんだよ!!」
「それでも！俺はお前たちに出会えたこの学園が好きだ！」
「お兄さん！話を進めないで！追い付けない！」
「転校生君……」「アニキぃ……」「にぃ……」
俺は遥の静止など無視して両手をいっぱいに広げる。
「さあ、お前たち！俺の胸へ飛び込んでこい！」
『うわあああああ～ん!!』
＊ガシッ！＊
「わ、私達も……」
「アニキに会えて……」
「よかっ……たよ……」
輝く夕日をバックに俺達四人は長く抱き締めあった。
「まだ昼前です！てか、僕は間違ってないのに僕だけ疎外感があるんですけど!!」

午後、俺は四人と離れて一人、この世界を勉強していた。
俺が今いる場所は学園の大図書館の読書スペース。周りはハ●ー・ポッ●ー見たいに階段やら紙やら本やらが浮かんでます。
そして、今俺が読んでいるのは、【世界の魔物図鑑】、【五大陸の歴史と島国の歴史】、【禍獣の謎】、【魔法の基礎～初級～】、【伝説の四人物語】の五冊である。もう借りた。
自分がこんなに本を読める人間とは知らなかった。
今更であるが、この世界世界のあらゆる所に翻訳魔法をかけているから異世界から来た俺でも普通に読み書き話しが出来てるのだ。世界で決められた原則である。・・・歴史の本に乗ってた。
「しっかし、目が疲れた～。ちょっと休憩～」
ぐるりと首を回すと強張っていた筋肉が解れていく。たまにちょっと痛みが走るがそれが心地好い。

「・・・」
もう一度ぐるりと、首を回すと視界に魔物の姿しかない。
そして、俺の半径数メートル以内に誰も通らない。
改めてここが俺がいた世界ではなく、魔物が人と同じ様に文化を築く一員であること。俺がこの学園で歓迎される様な
ことがないことなど、思い知られた。
別に俺はこいつらに何かしようと思ってもいないし、個人的に恨みを買われるようなこともしてない。
なのに、なんでここの魔物たちは俺を避けたり、拒絶したりするんだろうか？
「・・・はぁ～」
タメ息を吐いて椅子に座り直す。
考えても仕方無い。俺がどうにかできる問題でも無いだろうし、解決する気もない。
俺はあいつみたいに勇気を出して近付いてきてくれるやつとだけ仲良く出来ればいい。あっちでもそんな感じだったし、まあいいだろう。
俺は気を取り直して積んである五冊から適当に一冊とりだす。
「【世界の魔物図鑑】、か……」
明らかに体積がおかしな本をパッと開いてみる。
本が開き出てきたページに書かれていたのは……
『第2章・亜人種』
ページの区切り部分だった。
一瞬固まってしまったがそこからパラパラと数ページ捲ってみる。
「お、獣人か」
獣人のページを見つけたので読んでみる。
ココアと遥が獣人だからな。何かしらの弱点でも書いてあれば扱いやすくやるんだがな、ゲヘッヘッ♪
「え～と何々、獣人とは一匹の動物の特徴を持つ亜人種である。色んな動物に象った獣人が数多く存在するためこれといった共通の特徴はない。強いてあげるなら、人間が持ち合わすことのないパーツを

持っていることである。獣人はそれぞれの動物の特徴を持っているのと言うことを踏まえると対処方法は自ずと思い付く。例えば猫の獣人の場合、猫の特徴も持っているのと言うことであるからして、水が苦手でありマタタビで酔います。しかし、人間の特徴がないと言う訳ではないため、猫の獣人全てが水が苦手と言う訳でない。・・・」

ふむふむ、と頷きながら読書にふける。

「・・・・・・・・・・・・・・・はっ！」

窓から見える空は綺麗なオレンジ色の夕焼けだった。

「ふうぇ～さっぱりした♪」

風呂から上がった俺は机に腰掛けて明日のスケジュールを見る。

「明日も休みか。う～ん何しよう？」

ココア達が手伝ってくれたお陰で片付けが予定よりも早く片付いた。

外出は許可申請しなきゃいけないし・・・一日で貰えるのかな？

明日の予定に頭を捻る。

「ん？」

ふと、視界に入ってきたのは今日借りた本の山。

「これ読むか。うん、そうしましょう！寝ましょう！」

明日の予定も決まったので俺は自分のベットへ潜り込み。

おやすみ三秒とはいかないまでもすぐさま眠りについた。

どうだい、――――。そっちは楽しくやってるかい？

うわ、久しぶりに名前で呼ばれたよ。まあ、楽しいかな……。

そりゃよかった。私に感謝しなよ♪

それはない。

ありゃ、冷たいね？そんなにお母さんのこと嫌いだったか？
ああ、だいっきらいだね。
ふふ、安心したよ。まあ、体壊すなよ。
あんたらこそ、体壊さずに頑張るんだね♪
誰向かって言ってるんだい？
要らぬ心配でしたね。
ははっ、じゃね――――。
おう、またな母さん。

窓から眩しい日差しが差し込む晴天の朝。
「朝だぞーー！起きろーー！」
窓外から何やら声が聞こえる。
確か、モーニングコールのアルバイトやってるパーピィの娘だったっけ？
ん？
何やら体が重い。てか動かない!!?
なんだ!?金縛りか!?クラスにいた幽霊の娘がやったのか？俺、なんか怨みを買うことやった!?
うわーーーー！誰かーーーー！
「だ、誰……か、……助け……て」
「おお、少年よ、どうした悪夢でも見ているのか？ならば我の愛の抱擁ですぐさま安心させてあげよう」
「ッ!!?」
聞きなれない声に俺の意識が覚醒する。
頭の中の警鐘がガンガン鳴り響き、俺に危険を知らせる。
この声を聞いた瞬間に身体中に凄まじい悪寒も走る。
金縛りじゃなく、体を押さえ付けられていることに気付く。
総合評価、さっさと目を明けて死なぬ程度に頑張れ。
俺はバッと目を明けるとそこにいたのは……

「さあ、味わいなさい、少年」
ペロリッとしたなめずりしながら俺に覆い被さろうとする……
クラスのホモが馬乗りしていた。
「ひゃあああああああああああああ!!!」
その内、俺の絶叫が当たり前になる日常が来るのではないだろうか？

台無しだよチクショウ

「うおおおおおおおおおお!!!死ねえええええええええええ!!!」
「ふっふっふっ、それは無理な相談だな少年。死んでしまったら君を抱けないじゃないか」
「死ね！消えろ！さっさといなくなってくれぇえええ!!」
喉が裂けんばかりに声を張り上げる休日の朝。
俺の部屋に不法浸入し、俺の純白を奪おうとしたゲスを追い出そうと善戦していた。
俺は、何故か送られていたソフトな鞭と金属バットを両手持ちにして、間合いをとっていた。
一瞬でも気を緩めない状況だ。あと肛門も。
なんで俺がこんな目に会わなきゃならんのだ。
「まあ、落ち着いてくれ少年。今日はただ話をしに来ただけなのだよ」
武器を持った相手と素手で対峙するこのホモは俺のクラスメイトだ。認めたくはないがな。
見た目の特徴は、いつも浴衣の様な羽織を来ており、如何にも日本風の雰囲気をだしている。
顔は龍や馬の様に鼻から顎の部分が突起しており、ニヤリと口を緩めるたびに隙間から牙がギラギラと見える。
鼻の横から髭の様な者が重力に逆らって泳ぐように靡いてるし、皮膚中鱗だらけ、紙も鱗と一緒で白い色をしている。
ギラギラと俺を性的な目で見てくる眼。授業中もこの目で見てくる辺り、真性の変態であることは間違いない。
そんな奴が落ち着いてくれと言って、「はい、そうですか」って、言えるわけないだろうがぁ！
「ふむ、信用してくれぬか。これならどうだ？」
俺が完全に拒絶と警戒を露骨にしていると、ホモは急に胡座をかいて距離をとった。
「これでもダメか？」
「まあ、それなら」

渋々俺は妥協し、話だけは聞いてやる事にする。
しかし、武器は下ろさない。絶対。
「今日、私が少年の部屋に入ったのは他でもない。少年を助けるためだ」
「はい？俺を助ける？」
俺はいつから目図知らずのホモに助けられるような人間になったんだ？
まさか、ヤるとホモ力が増幅される伝説の肛門の持ち主が俺だとでも言うのか!!
母さんが好きそうな、ＢＬの小説みたいな設定だな、おい。
「いきなりでは話に着いていけないか。それも仕方無い、順を追って説明しよう。私の名前は羅皇紫電（らおうしでん）。この学園の最高位の生徒《六芒星の将》、通称六芒星。我はその一人だ」
「六芒星？」
何なんだよ。いきなりバトル漫画みたいな組織名出しやがって。
しかし、一体なんの集団なんだ？
「六芒星とは生徒でありながら学園長の次に決定権を持つ、生徒の頂点に座す六人のことを指す」
なるほど、学園順位トップ６の人達ってことね。
「そして、六芒星の集会、《瞬き》では最近ある話題でずっと論じていた。それが少年についてだ」
ん？トップ６が俺について何か話してたと。一体何を・・・？
「人間の転校生である少年がこの学園の一員として相応しいか見極めるために決闘が行われる」
なるほど、決闘で俺の力を見極めようと言うことですか・・・ん？
「け、決闘だぁあああ!?」
「そう、決闘だ。我はそんなことする必要は無いと反対していたのだが、２対１では無理であった」
「え？どゆこと？」
「今、六芒星の二人が別件で学園にいないのだ。故に、現在学園にいる六芒星は四人。一人は我、一人は傍観者、あと二人は反共存派、つま

り人間嫌いだ。故に2対1と言うわけだ」
「・・・」
おほほほ、聞きましたか皆さん？つまり、学園の生徒代表が二人掛かりで私をリンチしようってことらしいですことよ。
「ざけんなぁああ!!何で俺がそんな目に合わにゃならんのじゃああ！」
「気持ちはわかるが、まずは落ち着け少年」
「くぅ……じゃあ、どうすればいいんだよこれから」
「それなら、まだ普通に生活していればいい」
「決闘を申し込まれるのに？」
「何も、すぐに決闘をすると言うわけではない。正式な決闘なら学園から許可をもらわなくてはならないからな。多少ではあるが、私の力で決闘日をできるだけ延ばしてみる」
「ら、羅皇さん……」
「紫電でいい」
クラスのホモ、羅皇紫電。
俺は、この男を間違った捉え方をしていたのかもしれない。
だってスゴいいい人ですもん。
「とにかく、我の伝えたいことは確と伝えた。心配なら体の一つや二つ、鍛練するのだな」
満足した様な顔でその場から立ち上がり、タッタッとドアに向かっていった。
俺を心配して来てくれた男の背中姿を見て、俺は無償に格好いいと思っていた。
「おう！ありがとな、紫電！」
「ふふっ、少年。礼など要らぬから我と一緒に寝ないか？」
反射的に金属バットを投げていた。
＊ガンッ＊
紫電の元に届くときには、紫電は退室しドアはしっかり閉まっていた。
投げられたバットはそのままドアにぶつかり、力なく地面に落ち

た。
「台無しだよチクショウ」
俺はドアを睨み付けながら一言呟く。
しかし、その言葉とは裏腹に、心は何か懐かしい暖かい気持ちで一杯だった。
なんだっけか、この気持ち。昔はよく味わっていたけど。
思い出せそうでもないので思い出すのを止める。
「バカだろあいつ。・・・寝るか」
最後に一言いい放ちベットへ向かった。
胸くそ悪い目覚めを忘れるには、新しく気持ちよく起きるのが一番だと思ったからだ。
俺はすぐにベット上に乗り毛布に潜りこんだ。
「・・・」＊ムク＊
やっぱり止めた。
俺は急いでドアに向かい、鍵を閉め直してからバットを拾って再びベットに潜ることにした。
バットは念のためにベットの近くに立て掛けておく。
これでよし。
防犯対策をバッチリにし、俺は寝転がって目を閉じる。
さっきとは違って安心できる空間での安眠だ。ぐっすり眠れる。
「・・・スゥ」
段々と意識が落ちていく。このまま行けばもうすぐ眠れる。
・・・あぁ、そう言えば思い出した。あの懐かしい気持ちは友達とバカなこと言い合って騒いだ後の若干イラつきながらも楽しめた満足感だ。
ああ、懐かしいな。
そんなことを最後に思いながら完全に闇へ落ちた。

転校生が完全防犯をして寝付いた数十分後の寮の廊下。

「あ、あった９２４号室。ここかぁ」
転校生の部屋の前に一人の少女が立ち止まった。
彼女の見た目はパッと見て十代中間の顔立ちで、右目に黒い生地に白の逆十字架がプリントされている眼帯を付けており、髪型は朱色のツインテールである。
体型は顔に似合わず、胸部が思いっきり主張し過ぎており、そこら辺のグラドル顔負けのプロポーションをしている。そして、その体を引き立たせているのは彼女の服装である。
黒と薄いオレンジの横縞のタンクトップの下に薄い下着用の白いタンクトップ（若干透け）。鎖骨が見えたり、脇が見えたり、はみ乳してたりと色々けしからん。本当にけしからん。
下半身にはデニム素材のハーフパンツを着用しており、上衣と同じ柄のハイソックスを履いている。
ここまで聞くと普通にエロい格好をした女子高生で通るが、明らかにここの世界ではあり得ない素材、服装である。
「じゃあ早速。・・・あれ？」
＊ガチャガチャ＊
中の人物は睡眠妨害されまいと鍵を掛けていた。
しかし、彼女はそんなことなど露知らず。
「出掛けてるのかな？ちょっと除いてみよっか」
彼女の左目に妖しい紋様が浮かび上がる。
「・・・ん、寝てるの。・・・鍵借りに行こっと」
彼女には部屋の中が見えているようで、中にいる転校生がぐっすり眠っているのを確認できた。
そのまま鍵を借りに行った彼女の頭の中には『眠っている人の部屋に入る』と言う、普通ならかなり失礼な行為を実行だけで頭が一杯だった。
寝かしてあげてください。

・・・また重い！
二度寝から意識が戻ってきた俺は自分の体が、またもや重くなっているのを感じた。
この感じはまた押さえ付けられている、そう思った俺の頭の中に思い出したくない顔が浮かんできた。
『ふふっふふふ、どうした少年。我を思い出してくれるとは可愛いらしいことをしてくれるではないか。よかろう！その心意気に敬意を賞し、抱こう！』
頭の中の紫電が勝手に吐き気を催すことを喋ってきた。死ね！
思い通りにさせるか！ヤられる前に殺ってやる！
俺はノーモーションで馬乗り野郎を押し飛ばそうと腕を伸ばして、突く！
＊ふにゅん♪＊
「ぁお・・・」
マシュマロに5のダメージ
・・・無理だ、現実逃避できねー！
手のひら収まっている予想外の感触と触った瞬間に聞こえてきた予想外に可愛い声。
取り合えず、紫電じゃないことと、相手が女性であることはわかった。
問題は俺は今、《どこ》を触っているかだ。・・・きっと頬っぺだ。普通より大きい頬っぺただろう、そうに違いない！
断じて、私は禁断の赤い果実に触れてない！そうに決まっている。
恐る恐る目を開けて現実を確認しようとする。
大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫……じゃなかったよチクショー。
初めて見る女の子を俺が犯罪的行為に及んだと言う非情な現実が俄然に広がっていた。
分かりやすく言えば
目を開けた
女の子の胸にジャストミートな俺の手

オワタ＼（＾ｏ＾）／
「うおおおおおおおおおおおお!!」
「きゃあ！」
俺は怖いほど気合いが入った声を上げながら起き上がる。
すると、俺の上に乗っていた娘は面白いほど綺麗にベットから転げ落ちた。
しかし、今はそんなことどうでもいい！
スパイ映画顔負けの機敏な動きでベットから飛び出し、地面で受け身を取るために前転し、その勢いに乗ったまま移動しドアに手を伸ばす。
「逃がすわけないでしょ」
耳元から声が聞こえたとわかると、後ろに迫っていた気配を感じとることができた。
綺麗で細い腕が俺の首に回され絞められる。同時に足を引っ掛けられ前にのめり込むように倒れた。
「ぐはぁッ！」
俺の苦悶な声など気にすることなく彼女の細い腕が首を締める。更に、俺の足を彼女の足で粗めとりもう片方の腕でしっかり押さえる。これで俺は逆反り状態、足と首と背中と腹が痛い！
間接技と閉め技のコンビネーションだ！
「ぎゃあああああああッ！ゲホッ、…ッ！」
激痛により反射的に声をあげてしまう。しかし、首を絞められている状態で叫ぶと、今の俺みたいに酸素を求める様になり、更に苦しい結果になってしまう。
「ほら、ギブアップしなさい！」
「の、ノー……ッ！」
そんなに俺を犯罪者にしたいかのかこいつは！
今の状況じゃ暴行加えているのは彼女だ。裁判なら勝てるぞ！
しかし、胸を揉まれたなどと言われれば男の俺は直ぐ様悪者だ。クソッ！男は辛いぜ！
逃げると言う選択を封じられてしまった今、俺はここで決着を着け

なければならない！
ギブアップなんてしてたまるか！
少しばかり酸素を失っただけで俺の思考はアッパラパーとなり、よくわからない意地を張り始める。
そんな俺の態度が気に入らなかった彼女は。
「そう。なら、よい……しょっ！」
「あがっ！」
俺を体を絡めている腕に更に力を込め、痛みが激しさを増す。
「これならどうかしらね？ギブアップでしょ？」
「ま、っまだ、まだ……！」
「・・・ふんっ！」
「ッッッッッ!!」
ヤバイヤバイ！背骨がミシミシ鳴り始めた！
それに、息もできないできない！
叫ぼうにも声にならないこの痛み。俺の意識を飛ばすのには充分過ぎる破壊力をもっている。
「ほらほら！早くギブアップしないともっと痛くするわよ！」
「（パクパク）」
この地獄から脱け出そうと、つまらんプライドを叩き付けてギブアップしようとするが、声が出せずギブアップの意思表明ができない。てか、これはマズイ、死んじゃう！
俺は首に掛けられている手をペチペチ叩いてギブアップの意地を伝えようとする。
「コラッ！逃がさないから！」
「ッッコホォッ……」
腕を解こうと勘違いしたのか更に力を込められ首が締まる。
し、死ぬるぅ～～～!!!
自分でも感じられるほど青くなった顔で涎が垂れて酷く醜くなってきた。
意識も徐々に遠くなっていき、目も上に回りほぼ白目になる。
それでも生きようと力を入れてもがく。

「うわっ！ちょっとぉ！」
陸に上がった魚の様に醜くも美しくビチビチと跳ねる。それこそ死ぬもの狂いで。
「こ、コノッ！暴れるな！」
しかし、それでも彼女は逃がしてくれなかった。
更に体を密着させ腕が深いところまで伸ばせるようになり、拘束力が高まった。
＊ぷにゅん＊
「ッ!?!?!」
そして、体を密着させるため、強制的に彼女の実った胸が背中に押し付けられる。
ぐにににと、極限まで柔らかい果実が極限まで変形していく。
そんな、ハッピーマテリアルが背中にしっかり感じられるのは男の冥利に尽きる。
はっきり言います。ちょー柔らかいです。あと、気持ちよくなってます。
そのお陰で俺は体に力が入らなくなっていき、抵抗する力も無くなっていく。
ああ、俺はここで死ぬのか……。
そんなことを考え始めるほど俺の精神は限界に近付いてきている。
でも、美少女と密着状態で死ぬるってある意味勝ちじゃね？
・・・んなわけあるかぁ!!まだ俺は若い！このまま死ぬものかぁああああい!!
俺の中にあった生と欲望の執着心が泥沼に沈んでいた意識を引っ張りあげる。
俺に残されたラストターン！ここ行うべき行動はこれしかない！
意識を無理矢理右手に集中し、半ば投げやりに腕を動かす。
＊ぐにゅん＊
「ヒッ！」
俺の伸ばした腕が掴んだものは、彼女のお尻である。お尻である。
突如、お尻を鷲掴みされたのに驚いた少女は力を緩める。

その隙に足に絡められている手を強引に外し、無理矢理状態を起こす。
そのため、俺の上に乗っていた少女は、さっきのベットの時みたく、転がった。
「はぁ、はぁ、はぁ、ケホッケホッ、ああ～～～死ぬかと思ったぁ……」
「イタタ、いきなり何すんのよ。頭打ったじゃない」
「いきなり何すんのよ。じゃねーよ！俺の台詞だわ！」
「え？別に何もしてないでしょ？」
「・・・」
何を言っているんだこいつは。
「お前にとって人殺しはゴミを捨てるのと同じぐらい小さいことってことか？」
「私は殺さないわ。滅ぼすの♪」
「だめだこいつ。俺が何とかしないと」
取り合えず、変化球ばかりの言葉のキャッチボールをしたお陰で脳に充分な酸素は行き渡った。
体力の回復ならピカイチと自負できる。まあ、あんな家に居たんだ、それぐらいの進化をしないと生きていけない。
よし、情報収集といこうか。
「おい、お前「アサギ」……お？」
言葉キャセルだと!?
私は、そう言うの、嫌いだ！
「アサギ・アカツキ。よろしく」
「・・・アサギ、今からさる質問を嘘偽りなく答えろ。いいな？」
「善処するわ」
ボインで眼帯でツインテールの少女アサギ。
彼女は小生意気態度を崩さない。
「まず、なんで俺の部屋にいた？」
「こうやってお話ししたかったこら」
「なぜ俺を拘束した？」
「女の子の胸を揉んでおいて、突き飛ばして逃げる様な男は拘束する

べきだと思うけど？」
「ナンノコトデスカ？」
「どうだった？柔らかかった？」
「そりゃもう！……あっ」
「へー、そうなんだ」
「ごめんなさい、本当にごめんなさい」
あれ？なんか俺の立場が危うくなってきた。
「で、結局のところどうなんだ？これで満足か？」
「うん、かなり満足。で、こっから本題ね」
話をそらそうとしたら、乗ってきて更に違う方向にずれていった。
「もうすぐ、君は決闘を挑まれるよ」
「ああ、そのことか。それは知ってるよ」
「あれ？知ってたの？」
思惑と違った返答にアサギは首を傾げる。
俺がこの事を紫電に教えてもらったことは知らないからな。無理もない。
「お前こそ、なんで知ってんだよ？」
「え、私？私は情報収集得意な友達から聞いたの」
へー、友達から聞いたのか。
仲間から情報もらうとか格好いいな。今度、うちのチームにも情報屋を育成……あれ？ホロンとかそうじゃね？
「知ってるんだったら話は早いや。ねえ、私が君の稽古をつけてあげようか？」
「・・・はい？」
アサギの提案に俺はただ、聞き返すことしかできなかった。
素晴らしいモノになると楽しんでいた休日に、俺はどんどんとこの学園の深いところまで落ちていくのでした。

希望が……見えてきた

「魔法の使い方の基本はこんな感じよ。わかったかしら」
「まあ、わりと」
校舎の外の隅の方に連れてこられた俺はアサギから特訓と言うことで、魔法の使い方を教わっていた。
最初、こいつが急に現れて、急に稽古をつけると言った時には不安で仕方無かったが、いざ教わってみると実に分かりやすい。これ本当。
大事なところはしっかりと教えてくれるし、わかりやすい例え話で感覚的にも掴みやすかった、実際マーちゃん（魔法担当教師）よりもアサギが教えてくれる方が俺はいい。
「ほら、ボーッとしてないで練習やるわよ。そうね……まずはメロンぐらいの大きさの玉を作ってみよっか♪」
「了解！」
楽しい授業と言うのは、自然と気持ちが昂るものだ。
つまり、何が言いたいのかと言うと、今滅茶タノシー！
さて、魔力で玉を作るわけだが……これは魔法を使える人は一瞬で数個作れるぐらい簡単なことらしい。
しかし、俺のような初心者はそれさえも難しい。
これを作るには、まず体内に魔力を作り出すことが必要です。ＭＰみたいなモノです。
これの作り方って言うのが、アバウト過ぎるんだよ。人によってイメージは違うらしい。勿論、魔法に長けてる人は無意識に蓄えてます。寝てるときとか。
俺が分かりやすかったイメージは『体の中にある何かを感じて、それに力を込めて魔力に変換する』イメージだ。
何を言っているのかわからないと思うが、実際分かりやすいんだから仕方無い。俺はそう思った。
こう言ったイメージ一つでも感覚でわかれば、魔法は使えるようになるらしいから問題ない。わからない人が魔法の使えない脳筋さん

になるんだね。生まれつき、魔法の才能がない人もいるみたいだから、皆がそうって言う訳じゃないらしいけどね。
んじゃ、作りますか。
「・・・」
俺は目を閉じて、心を静める。
落ち着き始めたら、さっきのイメージをする。すると、段々と体内に温かい力が生まれていくのがわかる。
次にその力を移動させて手のひらに持ってくる。手のひらに力を感じたら、そこから慎重に力を放出していく。
すると、右手のひらに光る玉が儚い光と共に作り出される。大きさはどんぐり程度です。
それに左手を添えるような位置に置き、そこからも力を放出する。
右手と左手で形を崩さないように少しずつ魔力を送り込んで大きくしていきます。この時のイメージは、泥団子を大きくしていく、あのイメージ。
すると、どんどん魔力の玉は大きくなっていき遂に目標の大きさにまですることに成功した。
「お、おおぉ！で、できた！」
初めてやってここまでできたら、かなり才能あるんでは無かろうか!?
嬉しさのあまり、小学生の様に興奮し自然と笑顔になってしまう。
「コラッ！あんまり調子にのらない！気を緩めたら、爆発するわよ」
「ッ!?!!」
なんの躊躇もなく放たれた言葉に俺の全身は石の様に固まった。
「え？なに？これ、爆発すんの？」
「そうよ。だからまずは落ち着いて、その形をキープして」
「おっおおおおすすぅ～、キープゥキープゥ」
「……落ち着けの意味わかってる？」
爆発する、と言う可能性に動揺する豆腐メンタルはアサギの言葉を聞いて、行動を起こすと言うことが満足に出来ないくらい、俺自身に強い影響を与える。

気持ちの持ちようによって人は強くなると言うなら、今の俺はきっとゴブリンやスライムレベルだろう。・・・いや、前にクラスのスライムとゴブリンが喧嘩してたの思いだした。壁や床に穴が空いていて、周りの物は水で流されてたな。うん、今の俺はゴブリンやスライムより弱い、村人Ａレベルだな。

そんなことより、今はこの爆弾の処理が大事だ。

まずは考察だ。見たところ、魔力は綺麗な球を描いていてない。じゃあ、綺麗な球を作りましょう。

そうだなぁ・・イメージはおにぎりにしよう。強く握ればボリュームのない潰れたおにぎりとなり、弱く握れば固まらず、おにぎりの究極形体と名の高い三角形が作れない。

魔力で形を作るときも一緒だ。力を込めすぎ、込めなさすぎにならない、その力の領域に俺の意識を合わせるんだ。

力の強弱を繊細にコントロールすれば必ず成功する。

「ん、くぅ・・・ッ」

意識を集中していくとドンドン形が整っていき、最終的には目標より小さな玉ができた。

「あ、あっるうぇ～？」

目標よりも小さな物ができてしまい、気の抜けた声が漏れる。

かなりの魔力で作ったつもりなんだけどなぁ？

「それじゃあ、メロンって言うよりリンゴね。まあ、初めてやったにしては上手だからいいんじゃない？」

アサギが優しくフォローしてくれる。本人は本音を言ってるつもりかもしれないが、どちらにせよ気休めにはなる。しかし……。

「アサギ」

「ん？どうしたの？」

「あの、俺、ものスッゴい疲れた」

「え!?　」

足に凄まじい脱力感が襲う。立っているのも辛い、早く座りたい。なので、休んでもいいか？と言う意味も含めて疲れたと告げると、アサギは酷く驚いた声をあげる。

「ちょっと待って！今、気を抜いたら爆発するわよ！」
「ッ!!」
そうだった、俺は今にも爆発するかもしれない爆弾を持ってたんだ。
「どうすればいいの!?俺、もう足とか腕とか限界なんだけど！あと、スゴい眠い！意識が、切れる、！」
「と、とにかく！飛ばして飛ばして！上にぶっ放って！」
「上に飛ばすってどうやんの！ああ、視界が暗く、なって……」
「なんでもいいから！早くしないと！」
「あーもう、こうなりゃ自棄だ！」
覚悟を決めた俺は、全ての力を振り絞らんばかりの気合いで、魔力の玉を片手で掴んだ。
手のひらが熱い。やっぱり、握るのは不味かったか。ええい！今は形振り構ってられねー！
片足を前にだし、踏み込んで思いっきり空へ投げる。
「飛んでけぇぇぇぇぇ!!」
野球ボールの様に思いっきり投げられた魔力の玉は、空へと飛んでいく。
すると、綺麗な球になっていた玉も次第に形を崩し、光が漏れる。そして、
＊ズガァァァァァン＊
爆散した。
「あーあ、どうしよ。絶体、騒ぎになるよね。学園の上空に爆弾爆発させた様なもんだもん。バキ先生に殺されるぅ」
力の込もってない声で呟いていた転校生はその場に膝から崩れ落ちて、地面に座り込む。
「だあー、疲れたー。・・・はは、ははははっ！」
疲弊し倒れこんだと思ったら、突然笑い始めた。
「ははははっ、イーヒッヒヒ！俺にも魔法が使えた！よっしゃよっしゃ！」
転校生の顔は、疲れているにも関わらず清々しい笑顔を見せてい

た。
「ちょっとー、なに笑ってんのー？」
アサギがゆっくり此方に歩み寄ってき、アホを見るような目で見下ろしてくる。
その顔は口元が笑っていて、まるで上出来だと言っているようだった。
「できたぞ、コラァ……」
「そう、おめでとう」
とても充実した気持ちが身体満たしていく。
これからどんどん練習していけば、魔法を使いこなせるようになって、近いうちに挑まれる決闘でも善戦できるかもしれない。
「希望が……見えてきた」
俺は気合いを入れ直して起き上がる。
「ちょっとあんた、辛いんだったら無理にしなくていいのよ？」
「いやいや、俺が強くなるために付き合ってもらってんだから無理してでも頑張らねーと！」
そうだ、やらなきゃやられる。
紫電が足止めしてくれているこの貴重な時間を少しでも無駄にするわけにはいかない！
「アサギ、次やるぞ」
「君って意外とバカだよね。そう言うとこ、好きかな♪」
「はい？」
「ふっふふ、ほらやるんでしょ。指示するからそっち行って「お待ちを！」ッ！」
アサギが次の指示をしようとした時、突如割り込んできた声に中断させられてしまった。
転校生とアサギは声のする方に顔を向けると、そこには緑色の服を着ているエルフの女の子がいた。
三編みにしてある短め金髪に、赤い羽根が装飾してあるベレー帽。緑色の服は袖などが短くしてあり、服の上には所々に甲冑のパーツを着けており、全体的に防御を極限まで減らし、機動性を重視した格好

だ。
腰には剣と小さな布袋があり、剣の鞘と柄には目立った装飾がないかわりに使い続けた結果として残った傷跡がみられた。
如何にも、戦士と言う雰囲気を醸し出してた。
「なんのようかしら？私達は今、取り込み中なんだけど？」
「それは失礼した。しかし、私にも事情と言うものがあります。手短に終わりますので少々お時間を頂けないでしょうか？」
「・・・わかった」
「ありがとうございます」
怖いぐらいスムーズに話は進んでいき、アサギはエルフ少女の用件を呑んだ。
エルフ少女はそのままツカツカと進んでいき、俺の目の前へと立つ。
「え？」
急に俺の目の前へ立たれて俺は驚く。首をあげるとエルフ少女の鋭い目が俺を捉えていた。どうやら、俺に用があるのか。そう思った瞬間、何か嫌な予感を感じ取った。
そんな俺の心情など察することもないままエルフ少女は俺に言葉を発し始めた。
「貴方が噂の転校生ですね」
「あっ、はい」
「よろしい。では、私、ナチル・フィアーは貴方に決闘を申し込みます！」
「え？決闘？決闘……けっ、と……ぅ……うぇ!?決闘ぅ!!?」
「はい、決闘の申し込みです。決戦日はこちらが決めさせてもらいます。もちろん、許可の申請もこちらで全てやらせてもらいますのでご安心を」
「え？あ、ちょっと待って！け、決闘で断っちゃだめ？」
今の状態で決闘なんてしても負けは確定的に明らか。
せめて、もう少し魔法を使いこなせるようにならなければ。
そんな俺の希望を込めた問いに彼女の返答は……

「なんですって……？決闘を拒むと。……き、貴様ぁあああ！」
突如、怒声をあげてナチルは腰から剣を抜き、俺に降り下ろしてきた。
＊ヒュッンキンッ＊
「へ？」
降り下ろされた剣は俺の横ギリギリを通り、地面へと叩き付けられた。確かに俺目掛けて降り下ろされたはずなのに軌道がずれていた。
「ちょっとあんた……急に何するのよ。あんまり悪さばっかすると……滅ぼすわよ？」
アサギは片手をつき出しており、怒気を含んだ声でナチルに言い放つ。
どうやら、アサギが魔法で剣の軌道をずらしてくれたお陰で助かったようだ。
「・・・すみません。戦士としての私のプライドが決闘をあっさり断られるのに我慢ならず、ついカッとなってしまいました。本当に申し訳ない。しかし貴女、私の剣を見切り、魔法弾を当てるとは中々の腕をお持ちですね」
「それが何か？今、キレ気味だから言葉には気を付けなさいよ」
「いえ、私と一戦交えてみませんか？」
「なんですって？」
「ですから軽く戦いましょうと言っているのです。それとも、怖いですか？」
「・・・良いわ。そっちがその気なら殺ってやるわよ！」
「わくわくです」
なにやらアサギとナチルのバトルが今、目の前で巻き起ころうとしていた。
俺は疲労で動けない体を引き摺るように離れることにした。巻き込まれたくないんでね。
しかし、なぜこんなことになったのか？そんなことを考えた時に頭に浮かんだのは、昨日見た決闘とかふざけたことが起きる時期を延ばすと言い切った紫電の顔だった。

ホモ、仕事しろ!!!

だったら自信満々に宣言すんな！

俺が突如転校と言う名の強制輸送されてしまった学園・パンデモ。ここは、俺がいた世界とは別の世界、異世界にある学園だ。ここに通う生徒の大半は女子。そして、更に多くは人間ではない。

ここは、異世界の魔物達が己の能力を上げるための学園なのだ。

そして今、学園の裏庭で魔物達の戦いの火蓋が開かれようとしていた。

一人は、ツインテールと眼帯が特徴の女の子、アサギ・アカツキ。

もう一人は、金髪の三編みと赤い羽が付いたベレー帽が特徴のエルフっ娘、ナチル・フィアー。

彼女達は互いに互いを睨み合っていた。重い空気が辺り一帯を支配し、何かが起これば直ぐに戦闘勃発しそうな静かな空間。そんな場所に何故かいる俺は端っこで小さく座って見守っていた。

なぜこうなったのか？まあ、全ての原因は俺にあるようなものだ。と言うかそうです。

簡単に説明すると、さっき説明したような学園に突如、俺と言う転校生が突然現れました。

能力も人脈も不明、でも人間。そこで、学園の生徒代表の六芒星とか言う六人の生徒の内、二人が反共存派だと言うことで、俺に決闘を申し込んできた。きっと、どさくさ紛れに俺を殺そうとしてるんだろう。そんな中、俺に二人の協力者が現れた。一人は羅皇紫電、六芒星の一人で、決闘の日をできるだけ遅らせてくれると協力してくれた。もう一人はアサギ・アカツキ、理由はわからないが決闘の日に向けて魔法の特訓を約束してくれた。

俺自身にも対抗できる術を見つけ、安堵するのも束の間、アサギと魔法の特訓をしている所に突如現れ、俺に決闘を申し込んできたエルフの少女、ナチル・フィアー。ナチルの行動にアサギが怒り、勝負することに。

こう言うことでした。え？男ならお前が代わりに戦えって？・・・無理です。俺が命捨てて勝負するより、アサギが戦った方が勝算あり

ますし、なにより俺に戦闘手段も何もないし疲れて満足に動けないですしおすし。
「ナチルとか言ったよね？あんた、反共存派でしょ？」
「ええ、まあ。正確に言えば反共存派の六芒星《戦皇女のシュラ》様の命令でその男と戦うだけであって、私はそこまで共存などに興味はありません。ただ、戦えれば満足です」
「・・・戦闘狂ってやつね」
ナチルの言葉に軽蔑の目で睨み付けるアサギ。
アサギはナチルのようなタイプが苦手なのだろうか？アサギの機嫌が悪くなっているのがわかる。
「無駄話もなんですし、さっさと始めましょうか。構えてください」
そう言ってナチルは剣を鞘から抜き出し、両手で持ち直し構える。
「私に構えなんてないわ。いつでも気に入らない奴を滅ぼせる為の私なりの経験よ」
「そうですか……、ではッ!!」
気合いの籠った声と共にナチルは踏み込んだ。
その、たった一歩でナチルは一瞬にアサギを自分の間合いに入れ、横に斬りかかる。
アサギは自分の胴に迫る剣の側面に魔力を込めた腕で掌打を当てて弾く。
弾かれた剣は軌道をずらされ、標的を見失う。その隙に、もう片方の腕で殴り掛かる。
しかし、アサギの拳をナチルは手首を捻るように受け流し、逆にアサギの顔にカウンターパンチを放つ。
アサギも負けじと、拳を受け止める。
互いに敵から距離を取る為に後ろに下がる。その時に、アサギは魔力弾をナチルにばら蒔き攻撃する。
それに気が付いたナチルは、袋をまさぐる。袋から数本の小さな刃物を投擲し、自分にあたる弾だけを的確に撃ち落とす。弾はそのまま爆散する。
まずは1ラウンド終了か？

「思った以上にお強いですね、素晴らしい」
「別に……これぐらい普通でしょ」
　俺は、その基準より弱いです。
「しかし、わかりませんね。貴女程の実力者なら学園に名が通っていない筈はないと思いますけど？」
「それは、あんたみたいな戦い好きの連中が勝手にやってるだけでしょう！私はそんなのに興味はないの！」
「勿体無いですね、貴女の強さなら次々と勝負を挑まれ、戦いの日々に身を投じることができると言うのに」
「私を……あんた達みたいなのと、一緒にするなぁあああ!!」
　ナチルの言葉にアサギは怒りの混じった叫び声を上げる。それに呼応して、アサギの眼が妖しく輝きだした。
　面と向かったら、射抜かれてしまうかも知れない眼でナチルを睨み、体をとてつもない魔力が覆っていた。俺の様な少しかじった程度の素人でも、凄まじいと感じることができる魔力の質だ。
「貴女……魔眼をお持ちでしたか。これはぁ、とてもぉ、楽しくなってきましたぁぁ!!」
　ナチルは、アサギの眼が魔眼だと認識すると、徐々に冷静そうな無表情の顔を崩していき、目を開き気持ち悪い笑みを浮かべた表情に様変わりしていた。極度の興奮を覚え、その快感を我慢ならんと待ち望む顔。ぶっちゃけ、女の子がしちゃいけない表情をしていた。
　アサギは怒りで体を震わしている。戦闘狂、戦い好き、この言葉に極度に反応し、言葉にならない顔をしていた。アサギの過去に何があったのだろうか？助けてやりたい、俺はどうすればいい？相手は、武器を持った戦士、おまけにアサギの嫌いな戦闘狂。きっと冷静では、いられないだろう。最悪、俺が……
「貴女の魔眼の力……私の体に刻みこんでみてくださいぃ!!」
　ナチルはアサギに向かって走っていく。腰より下の方で剣を構え、身を屈めながら走るその様は正に、獲物を狙う【獣】の様だった。
「消えろー！」
　アサギは両手に魔力を集め、大量の弾としてそれを放った。

魔力弾の雨がナチルを正面から襲う。
それをナチルは避ける……ことなく突っ込んで行った。
＊スガガガーン＊
次々と爆発が起こり煙が舞い上がる。その中から風の様にナチルが飛び出してきた。
装着していた甲冑はさっきの攻撃でとれて数が減っており、服も所々破けている。
しかし、その破けている所から覗く、彼女の白く美しい肌には傷一つ付いてはいなかった。あの攻撃の中に突っ込んでおきながら無傷とは、彼女が一流の戦士と言うことなのだろうか？
ナチルは速度を緩めることなかアサギに向かい、走り続けた。
そして、アサギの近くに迫ったその時、最後の一歩を　力一杯踏み込み、剣を突き出しながら突撃する。
「必殺・尖刀突苛（せんとうとつか）ッ！」
閃光の様な鋭い突きがアサギの顔面目掛けて放たれる。
＊パッーンッ＊
周囲に響く乾いた破裂音。辺りに飛び散り赤く汚す血。そして、その全ての現象の中心にある、頭部の無い体。
俺はその光景の始まりから終わりまでを目撃するはめになった。
「え……あ、アサ、ギ……？」
名前の主は返事をすることなくその場で崩れるように倒れた。
それを見下ろすように立っているナチル。返り血で顔を染めても、動揺の色など全く見せない、今まで通りの無表情で呟いた。
「あ、やってしまいました。……どうしましょうか？」
何を言ってるんだ、こいつは？
人を殺しといて、花瓶を割ってしまってどうしよう？みたいな困り方をするナチルに、俺は頭がすぅーっと何かが引いた後にじわーっと熱くなっていくのを感じた。
やろう、ぶっ殺してやらぁ！
頭が空っぽになり、無意識に立ち上がる。目線の先には、まだ無表情の困り顔をするナチル。奴に向かって歩を進める。

「なにかお困りかしら？」
その声を瞬間、俺の意識がはっきりして歩を進めるのを止める。
同時にナチルの足元一帯に魔法陣が紅く輝きながらを浮かび上がり、
その場所を木っ端微塵に爆破した。
＊ズガーンッ！＊
「ぬおッ！」
木々は揺らす爆風がその威力を物語る。俺も吹き飛ばされないように背凭れに使っている木にしがみついていなければならないほどだ。
「・・・」
弱まっていく爆風の中、少し目を細め周りの状況を確認してみる。
煙が舞っていて何がどうなっているのかはっきりとわからない。
何か今の状況を把握できる物はないのか？
ん？今、なにか光の様なモノが見えたような……
その疑問を確信に変えるように次々と一瞬の光が現れては消え、現れては消えていった。
今、間違いなく彼処で二人は戦っている。
爆風で舞い上がった煙は次第に止み、中から身体中に傷を負いながらも無表情を保っているナチルと、左目を輝かせながら余裕の笑みで魔力弾を放つ、無傷のアサギの姿があった。
「アサギ！お前無事だったのか!?」
理解できない現象を目の当たりにした興奮が俺を奮わせる。
そんな俺の声に反応を示すように横目で俺を一瞥すると、
「説明は後で。今は私がこいつを倒すところを見てて！」
そう言いながら、両手で魔法陣を展開し、炎、雷、土の一斉掃射をナチルに放つ。爆撃の如く放たれた魔法攻撃がナチルを呑み込んだ。
「お、おお……」
その場所の草木にメラメラと火が燃え、黒く焦げ、悪臭が漂う。
モクモクとあがる黒い煙からはナチルの動く影が確認できない。
「や、やったのか？」

「そんな簡単にはやられませんよ」
「ッ!?」
突如聞こえてきたナチルの声は煙の中からではなく、その後ろから聞こえた。
「おー熱い熱い、痛い痛い」
服を叩いて埃を落としながら、煙の後ろからヒョコッとナチルが現れた。彼女の服は更に破け、かなりセクシーな感じになっている。どうしよう……、男として、しっかりと焼き付けておくべきか。それとも、目をそらし何も見なかったことにするか。……けっこう肌綺麗だなー。
「目、潰されたくなかったらさっさと目を瞑りなさい」
「気持ち悪い目で此方を見ないでください。不快すぎて、精神が不安定にナリマス」
あ、バレてた。二人からの容赦の無い言葉責めにゾクゾクできる俺がいる。これもストレスしか溜まらない学園生活で得たスキルだ。嫌なことに快楽でも覚えないとやってられない。ホント……マジで……グスン。
「貴女の魔眼……能力は一つだけではないのですか?」
「それがなにか?」
「だとしたら、初めての事例ですよ。基本、一つの魔眼に能力は一つが当たり前と言うのが世界の常識ですから」
「へーそう。興味ないわ」
へーそう。初めて知ったわー……てことは、アサギが死んじまった様に見えたあれも魔眼の能力の一つだったってわけか。
すごいな!これならナチルに勝てるじゃないか!
「アサギー!頑張れー!」
「うっさい」
怒られた。
理不尽な物言いに俺の精神はズタボロです。
「・・・時間切れ、ですか」
突如、ナチルの口から漏れた呟き。それが合図だったと思わせる様

なタイミングに……
「その勝負、待たれよ！」
その場所に澄んだ男の声が響き渡る。
激戦の真っ只中に発せられた声にいち早く反応したのは、他でもない、この俺だった。何故なら、その声の主は今一番俺がぶん殴りたい人物、
「紫電」
「またせたな、少年」
羅皇紫電その人だった。
ドヤッと決め顔をする紫電。俺は、この状況に終止符を打ってくれるであろう人物の登場に深く感謝……すると思いで？
「ふざけんな！なにがまたせたな、だ！お前が決闘日を延ばすとか言ってたから安心しきっていたのに、宣言したその日に決闘日告げられることになって、挙げ句アサギとナチルがバトルし始めるし、もうぅ……なんなんだよ!!」
ぶつけてやった。俺の胸に溜まっていた物を吐き出すように、こうなった原因を責める。
疲れて動けなくなってるけど気にしない。怒りで我を忘れてるから元気です。
「ふっふっふ、少年。やはり無理だったのだよ延期は」
「だったら自信満々に宣言すんな！」
「かっこよい所を見せて少年の好感度上げたかったことはわかってくれ！」
「必死に言うのやめて～！無理だから！上がるわけないから！」
「目標は……諦めなければ……叶うのだ」
「俺がそのふざけた幻想をぶち壊す！」
はぁはぁ、疲れた。吐き出す物吐き出せてもう満足だ。
「ふっふっふ。さて、待たせてしまったな、ナチル・フィアーよ」
ぜーはーぜーはー言ってる俺を見て朗らかに笑うと、紫電はナチルの方に顔を向け話始めた。
「いえ、それほど待ってませんでしたのでお気になさらず」

「そうか。では早速だがナチル・フィアー。今すぐ戦いを止めてもらおうか」
「六芒星に魔眼使い。二人を一度に相手するのは楽しそうですねぇ。出来ればこのまま戦っていたいです」
俺は眼中に無しか。
「何を言っている？手練れはもう一人居るだろう？」
「はい？」
おお、さすが紫電。俺のことを忘れてはいなかった！
「先程から貴様の後ろで構えているぞ」
「ッ!?!!」
俺じゃなかったのね。なんとなくそんな気はしてた。
ガッカリした俺は、そのもう一人の手練れの顔を拝もうとそっちに顔を向けるとそこには、
竜が、いた。
「ッ!?貴女は！」
そいつは、持っている槍の先をナチルの背中に構え、何時でもナチルの心臓を突き刺せる様にしていた。その顔には図りきれない怒気が滲み、体から怒りのオーラがあふれでており、見ているだけで生きてる心地がしなかった。
そいつの顔を見るなり、ナチルは驚きの声をあげる。どうやら、そいつのことを知っているようだった。
しかしッ！俺は更に驚いた。それこそ声が出ないくらい驚いた。何故なら、そいつは俺の友人…
ライラ・ネオルドだったからだ。
通常でも強面なのに、あからさまに不機嫌なのだからその怖さに拍手が掛かるのは当たり前だ。
はっきり言って、友人としてあんな顔はやめてほしい。
「何時の間にいたんですか？視界に入るまで存在に気付きませんでしたよ。それにしても……すさまじい殺気ですねぇ。早く逃げ出してしまいたいくらいですよ」
「・・・・」

そう言ったナチルの顔には冷や汗が静かに流れており、膝も小刻みに震えていた。
あの戦闘大好きのナチルを逃げ出してしまいたいと思わせるなんて、どんだけなんだよライラっち!前にみたカワイイシーンが嘘みたいだよ!
「退いて、くれるな?」
「・・はい、そうさせてもらいます。しかし、一言よろしいですか?」
ナチルの言葉に紫電が頷くと、ナチルも一礼し俺の方を向いて口を開く。
「決闘日は来週の日曜。時間は……午後3時にしましょう。場所は南館でよろしくお願いします」
それだけ淡々と言い残すとそそくさと、その場から去っていった。
・・・あれだけ凄まじかった戦闘が嘘かの様に、呆気なく終わってしまった。
「嵐のように来て、嵐のように去っていったわね……ぁッ」
「おい!アサギ!」
突如その場にアサギが座り込んだ。俺は必死に体を動かして近くに寄っていく。
「アサギ、大丈夫か?」
「だ、大丈夫。ちょっと疲れただけだから心配しないで」
アサギはすごく疲れている様な顔色をして辛そうに見える。
アサギにはあまり、ダメージが無かったように見えたけど、魔眼とやらがそれほどまでに体力を奪う物なのか。
「本当に辛くないのか?苦しかったら保健室連れてくぞ?」
「・・・なに背中擦ってるの?」
「え?辛いかなーって思って……」
「そう。……保健室は良いから、もうちょっとやっててよ」
「うん、わかった」
なんだかアサギの顔色も良くなってきた。
俺を助けてこうなっちゃったからな。アサギの力になれてるなら嬉しいな。

「ふふっ♪」
「どうした？」
「なんにも」
「そうです「うわーーーん!!」うっ！」
突然ライラが泣きながら俺にタックルしてきた。
「アダッ！」
俺はそのままぶっ飛んで頭を打つ。
そのままライラに乗られる体制で倒れる。
「い、イタタタぁ」
「うわーーーん！」
「うっさいわボケッ！」
＊ゴチン＊
「「イタッ！」」
目の前で泣きわめくライラに拳骨をお見舞いする。しかし、こいつが石頭なのか殴った拳が痛い。
「痛い～、叩くなんて酷いなぁ」
「目の前で泣き叫ぶのは酷いとは思わないのかライラさんよぉ？」
「君が心配だったんだ」
「え？俺が？」
「紫電から、君がピンチだと聞いて、殺されるんじゃないかって思ったら、いてもたっても居られなくなって、慌てて来て、本当に、心配したんだぞ！」
ライラが大粒の涙を浮かべながら声を荒げる。
そのまま、顔を俺の胸に擦り付ける。服が汚れるとか、角が痛いとか思ったけど、今はこの泣き虫戦士を元気付けることが先だ。
俺はライラの腰と頭に手を乗せる。すると、ビクッとライラの体が反応を示した。俺は気にすることなく頭を撫でるやる。そして、
「ありがとう」
たった一言呟き、口を閉じる。
こんな俺の為にここまで泣いてくれる友人はなかなかいない。だから精一杯の感謝の言葉を告げた。

「そうだ、感謝しろ」
顔を見せてくれないライラから小さな声が聞こえた。
それが可愛くて思わずクスクスと笑ってしまう。今度、お礼しなきゃ。
そんな和やかな空気に包まれ、今ある平和に浸っていると、顔に影が掛かる。
何かと見ると、アサギが俺を見下ろして立っていた。
相変わらずのでっかい胸とスカートからもろに見える縞パン。いやー眼福眼ぷ……
「いつまでくっついてんのよ淫獣！」
＊グシャ＊
次の瞬間、アサギの靴底が俺の顔面にめり込んだ。
「ぎゃあああ！鼻がー鼻がー!!」
「どうした!?顔か？顔が痛いのか？」
「だ、大丈夫だライラ。大丈夫じゃないのは……アサギ！いきなり何をするだー！」
「何をするって、公衆面前で抱き合うアホに注意しただけよ」
「ハッ！」
アサギの言葉で我に帰る俺とライラ。すぐに立ち上がり、少し距離を取る。スゴく恥ずかしい、死にたい。どうやら、ライラも同じ境遇の様で、顔を赤らめている。やったカワイイ、ギャップ萌えバンザイ！
「でさぁ、あんたに聞きたいんだけど……」
「ん？なに？」
「そいつ誰よ」
アサギが指差し示していたのはライラだった。
「ああ、こいつはライラ・ネオルド。俺の友達です」
「はじめまして、ライラと言う者です。以後、よろしくお願い致します」
「見ての通り、顔は怖いが良いやつだ。仲良くしてやってくれ」
「ふ～ん、友達、ね……」

アサギの強張った顔が少し和らいだ様に感じたのは気のせいか？
「はじめましてライラさん。私はアサギ・アカツキって言います。よろしく」
「あッ、アサギさんですね！よ、よろしくお願い致します！」
自己紹介をするとアサギはライラに手を差し出す。それに応じて、ライラも手を出して握手する。
ライラの喋りが変なのは新しい友達ができるから、舞い上がってるのが原因だろう。
いやー、いいね♪友情ですね、青春ですね！
「えと、貴方は彼とどういったご関係ですか？」
「ご関係もなにも、ただのとも「結婚相手です」……はい？」
俺が友達と言うタイミングに、こいつはなんて被せてきた？聞き間違いか？
「え、あ、いや、す、すみません、もう一度お願い「だから、結婚相手だってば」……そ、そうですか」
「そうですか、じゃねーよ！なに納得してんのライラ！アサギも適当なこと言うな！」
「え？本当のことよ」
「え？」
どゆこと？お兄さんさっぱりなんだけど？
この子の言ってることが理解できる人は今すぐ俺の所へ。
「もう、想い人持ちか……でもいい。私は友達だ。彼が愛情を優先しても、私の友情は変わらない。それで良いじゃないか……むしろ、友達として彼らの後押しをするのが本当の友情じゃないか。二人ともお幸せに、ははははぁ」
ライラさんが光を失った目でなにか呟いてらっしゃるー!!
「そろそろ我も話に混ぜてもらえないか？」
さっきから話に入ってこなかった紫電が待ち飽きた様な顔で割り込んできた。
混ぜてくれって言うがね、これ以上なにか悩みの種が増えたら、精神退化して現実逃避しちゃうよマジで。

「なんすか紫電さんよぉ？こちとら色々起こりすぎてストレスがマッハなんですけどぉ？」
「まずは謝らせてもらいたい。本当にすまなかった。決闘日を延ばすことができなくて」
「・・・あーーー!!そうじゃん！忘れてたわ！お前ふざけんなよ！延ばすとか今朝普通に宣言したじゃん！自信満々な顔してたじゃん！延ばすどころか、本日付で申し込まれちゃったよ！殺される～～～～～ッ!!」
「いや、本当にすまないと思っている。まあ、こちらの話も聞いてくれ」
「言い訳か？ハイそうですかで聞くわけな「しっかり説明しろ！そんな曖昧な言い方じゃわからないぞ！」「あんたの理解力じゃ一から順に話さなきゃならないでしょうが！そんな面倒臭いことしたくないのよ！」……ごめんなさい。お話を聞かせてもらえませんか？」
　なんだか、アサギとライラが言い争って様で嫌な予感しかしないので、お話を聞きましょうそうしましょう。
「ああ、聞いてくれ。少年に悪い話じゃないのだ」
「期待します」
「では聞いてくれ。少年と約束した後、部屋を出ていった我はすぐに行動に移った。しかし、反対派の連中は思いのほか早く計画を進行していたようで、我が今さらなにをしても手遅れだった」
「じゃあ、教えてくれりゃよかったのに」
「そう言う考えにも至っていたが、少年に話したところでなんの解決にもならないとわかりきっていた故に、話さなかったのだ」
「うッ……まあ、そうなんだけどさぁ」
「そこで我は思い付いたのだ！もう、最初から戦わせて勝っちゃえばいいさッと」
「かるっ!?」
「そして我は、すぐにある人物に協力を要請した。その人物こそ、我が一番の親友にして兄弟！そして、最強の男だ！その彼に君の特訓を頼んだのだ！……後は少年の友人であるライラ殿を誘って助けにきた

のだ」
「・・・」
悪寒が走る。ゾワゾワっと全身を絶対零度の氷針に突き刺されたような絶対的な悪寒。
だってヤバイもん。紫電さんがここまでテンション上げて誰かを説明してんだよ？ライラとの件は普通になってるし。てことは、その親友（兄弟）ってのは……その……つまり、だ。
アッチ系のお人ってことじゃね？
「ファーハッハッハッハッ!!つまり、そう言うことだ！」
「誰だ!!?」
突如、豪快な笑い声がこだます。その笑い声は学園の屋上から聞こえ、上を見上げると、そこには沈みかけの太陽による逆光でシルエットになっている人影があった。
「むぅぅ、ッとうッ！」
人影は屋上からジャンプして飛び降りてきた。
＊ズドーンッ！＊
地面に着地すると地面が砕けた。おいッ！骨とか色々大丈夫かッ!?
人影は方膝着き、片手を地面に置いている。まるでター○ネーターの様なポーズでした。
「君が噂の転校生か。話は吾輩の親友、紫電から聞いておる。吾輩にまかせよ！」
人影その場から立ち上がり喋りながら俺に向かって歩いてきた。そして、俺の目の前で立ち止まり、まかせよ！のところでビシッ！と上腕に力瘤を作り、アピールするようにポーズを取る。ボディービルダーですか？
「紹介しよう少年！彼こそ我と同じ六芒星、超人英雄テオ・レオナルドだ！」
「テオと呼び捨てで良いぞ！よろしく頼む少年よ！」
金色の肌。ツルツルの頭にオレンジ色の髪。厳つくも少しの優しさが見える顔に伯爵とかがしてそうなくるりんとしている髭。筋肉

隆々のマッチョマンの腕は俺の胴ほどの太さ。身長も圧倒的でデカイ。着ている物は、ネクタイとブーメランパンツ……だけ。
どっからどう見ても変態です。
うわ、ブーメランパンツがテントを作ってるよー。
取り合えず現実逃避するよ。はい、白目～。
「ムッフフ、噂通りカワイイ顔をしているなぁ」
「そうだろそうだろ。フッフッフゥ」
ヤダーナンカキコエル。デモキコエナーイ。シラナーイ。
「貴様ァ!!いい加減にしないかぁ！卑猥娘がぁ!!」
「こっちのセリフよ、バカ爬虫類ィ!!」
・・・誰か助けろよマジで。

……変

学園【パンデモ】のにある、一つの教室は私――ココア・ミクスのクラスだ。

窓際の最後尾が私の席で、私はそこから窓の外を眺めています。

そこから見える景色は清々しい朝を彩る庭の風景。まるで、今日と言う日が素敵なモノになると暗示しているように私は感じた。

なんだか今日はとってもいい気分になれた。

「んふふ♪」

無意識に尻尾を振ってしまう。

今日を素晴らしく感じるのは、一昨日からの休日が良いものだったからかな？

特に土曜は楽しかった。ニーナちゃん達と一緒に転校生君の部屋に遊びに行って、ご飯食べたり、お部屋のお掃除手伝ったり。

「あぁ、アレ美味しかったな～♪……ハッ！」

思い出しただけでも涎が垂れる。すぐに口周りを急いで拭く。

「あ、そうだ。転校生君にお礼言わなきゃだね。……早く来ないかなぁ？」

私の席の隣にある空いた席を見て、教室のドアを見る。

「・・・」

ここで都合良くあの人が来る程、世界は思い通りには進まない。

そんなこと、頭では理解してるつもりなのにどうしても期待はしてしまう。

「別に良いよね、それぐらい」

「お～い、ココアっち～♪」

「ん？あ、みんな！」

声を掛けてきたのはニーナちゃん、ホロンちゃん、遥ちゃん達だった。

「どうしたッスか？ドアなんか見詰めちゃってさぁ」

「いや、別に何でもないよ」

「わかった……にぃ、待ってる……でしょ？」

「……ホロンちゃん、なんでわかったの？」
「乙女の……勘……フッ」
「なんで鼻で笑ったの？」
相変わらず、この子達は元気そうだ。でも一人だけ……
「……本当にお兄さん遅いですね。何かあったんでしょうか？」
遥ちゃんだけはさっきの私みたいに不安な表情でドアを見詰めている。尻尾も垂れちゃってて、心情を簡単に読み取れた。
「大丈夫ッスよ、アニキなら。ほら、こうしてる間にドアがガ…＊ガラッ＊ってホントに来たッスね」
ドアの方を見てみると、首を曲げて顔を下に向けている転校生の姿があった。
「……変」
「そうだよね。お兄さんの様子、ちょっとおかしいよね？」
そう、明らかにいつもの彼の明るさがない。
どうしたんだろう？
その後も彼は、ゆっくりとペースを変えずに歩いてくる。
「・・・」
そして、私達の近くを目も向けず通り過ぎていきました。
「ちょっと！アニキ！せめて挨拶ぐらいするッスよ!?」
ニーナちゃんの言葉に反応示したのか、その場で立ち止まり此方に振り向く。
「おはようッス！アニ、キィ!?」
「あーおはぁ……」
振り向く彼にニーナちゃんが挨拶すると、顔を合わせた瞬間、ニーナちゃんが悲鳴にも似た驚きの声を上げる。私や他の二人も声は上げてなくても驚き、唖然としてしまった。
何故なら彼の顔が酷いことになっていたからだ。
「ど、どうしたッスカ!?」
「ぁぁ、なにが……？」
「なにが？じゃなくて、顔が酷いことになってるッスよ!?」
彼の顔は病人の様に青くなっており、目は充血し光を失っていた。

目の下には大きな隈ができており、頬は窶れて、見るからに酷い有り様だった。
はっきり言って、下手な魔物より化け物っぽい顔だった。
「あ？ああ、これね。色々ぉ……あったんだよ」
そう言って彼は私の隣の席に座り、体をぐで～んと机に倒した。
「い、色々……ッスか……？」
「そう……色々……だよ」
遠い目をしてぼーっと話す彼と、その姿を緊迫した顔で見詰めるニーナちゃん。
このままだといけない気がした私は取り合えず、話を切り出してみた。
「一体何があったの？一昨日はあんなに元気だったのに」
「・・・実は昨日な」
その言葉を切っ掛けに、彼は自身の見に起きた出来事を話し始めた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

あの日、俺はゆっくり過ごす気でいたんだ。そしたら、なんの因果かよくわからんこと巻き込まれたんだよ。
よくわからないこと？
朝起きたら、ほら、俺の席の隣の隣に座ってるホモ……
羅皇さんですか？六芒星の。
そうそう、羅皇紫電。よく知ってるな遥。
いや、六芒星の名を知らない生徒なんかこの学園にいませんよ？
・・・で、朝起きたら、その紫電が俺に馬乗りになってたんだよ。行き荒くしてね。
……わ……お……♪／／／
なんでそんな反応するのホロン？……まあ、そんでさ、紫電が言うに、俺、もうすぐ決闘を申し込まれるんだって言うんだよ。人間嫌いの奴等から。

あ～いるよね～そう言う人達も。
うちのクラスにも何人かいるッスもんね～。
・・・＊キョロキョロ＊
お兄さん、気にしちゃダメですよ。
……ありがとう。その後、決闘申し込まれるって言われたから、なんとかしなきゃなぁ～って思ってたら、部屋に無断侵入してきた子に魔法を教えてもらうことになったんだ。
え!?その子怪しくない!?いいの!?
いいんだよ。割りと解りやすく教えてくれたし。
へぇ～、そうなんだぁ。
うん。そしたらね、なんか魔法の練習途中に、このタイミングで決闘申し込まれちゃったんだよね～。
……偶然
ホント、凄い偶然だよ。でも、なんでか知らないけど、魔法を教えてくれてた子と決闘申し込んできた子がバトルし始めちゃってもう大変だったんだよ。
だ、大丈夫だったんですか？
うん、なんとかね。あいつも一生懸命助けてくれたし、途中で紫電が仲間を引き連れて、その場を何とかしてくれたんだよ。……本当に申し訳なかったな。
大変……だったんだ……。
その時は何とかなったんだけど。結局、次の日曜に決闘することになっちゃってねぇ。……そこからが、大変だったんだよ。
ど、どうしたッスか？体、震えてるッスよ？
もう、心身共に疲れきってて休みたかかったのにさぁ。時間がないとか、今の俺じゃ死ぬ気で強くならないと勝てないとか言われて、無理矢理修業させられたんだよぉ……！
だ、大丈夫!?
アサギの奴、最初より無茶苦茶するようになってよぉ？魔法は口で伝えるより、直接見せて盗ませた方が良いとか何とかいい始めて、俺にありったけの魔法を射ちまくりやがってよぉ。笑ってたよ、俺が泣

きながら逃げ惑う姿見て、ＳＭプレイの女王様の様な笑顔で笑ってるんだよッ！怖いわ！
ＳＭプレイしてたんすんスか!?
ライラもノリノリで俺に武器を振り回しやがってよぉ！紫電から頼まれたのはいいけどよ、やり方はがあるだろ！『やはり、武器は手取り足取り教えるより実戦で、動きを見せた方が効率的だ！』とか言ってよぉ！なんでお前ら意見が一致してんだよ！喧嘩してたじゃん？仲悪そうだったじゃん？こう言う時だけ息ぴったりとかやめろよ！続けて、逃げまくったわ！
にぃ、落ち着いて……！
紫電も急に『では我も何か教えてやらねば』とか言い出して、妖術みたいなのの説明し始めてさあ！なに言ってるか全然わからなくてよぉ、最終的には結局実戦練習になっつ体も心もヘロヘロ！『そう、妖術は他の戦闘手段と違って、心の負担が強いのだ』だってお！そりゃ疲れるわ！アホか！
六芒星の方にアホとか言っちゃダメですって!!
テオさん！止めて！無理、無理だから！人間はそんな物着けて動けないから！そんなことしたら死んじゃうから！止めて止めて止めて止めて止めてごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいあばばばばばばばばばば
うわあああああああん、転校生君がぁ壊けたぁあああ！
うわ、ココアっちがガチ泣きし始めたッス！誰か何とかしてッス！
＊ガラッバンッ！＊（ドアの開く音）
ふはははははははは！お困りとあらば吾輩が助けてやろう！
うわ！テオ様！帰ってたんですか!?
遥殿、その話は後だ。取り合えず、ココア殿と少年を保健室に連れていくぞ！手伝ってくれ！
私も……手伝う……ニーナも。
りょ、了解ッス！
◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ん、んん～うぅ、あ？」
目を覚ますと、目の前の真っ白な天井と周りを囲っている白いカーテンが視界一杯に広がっていた。
独特のアルコール臭が鼻を突き刺す。ふかふかの白いベットが俺の体を優しく包む。周りは静かで自分以外の生物はいないんじゃ無いかとさえ思えた。
恐らくここは保健室だろう。しかし、今の俺には心安らぐ桃源郷の様な場所に感じてしまう。
「しかし、なんで俺はこんな所で寝てんだ？」
現在、俺がここにいる理由がわからない。
気を失っていたのは何となく分かるが、なんで気を失ってたんだっけ？
「まあ、いいか。昨日は酷い目に遭ったし、ゆっくり休ませて貰うことにしよう、そうしよう」
瞼を閉じ、再び眠りの世界に身を委ねる。が、そこに一つの声が響く。
「少年よ！目を覚ましたか?!」
ここで狸寝入りでもしていれば遣り過ごせたかもしれないのに、俺の体は【防衛本能】とレベルまで高められた危機察知能力が反応し、思わず状態を起こしてしまう。すると、
「ヒィッ……！」
カーテンに映る一つのシルエット。腕胸足腰、全てが一般人では有り得ない太さをしており、……面倒臭いので要約すると、影でも分かる筋肉ダルマがそこにいたんです。
「おお！返事をすると言うことは、目を覚ましたのだな少年！」
大きな声を上げながらカーテンを開けて登場したのは、【あッついッ！顔】で滝のような涙を流す筋肉魔神、テオだった。
昨日知り合ったばかりなのに昔から付き合いのあった友人みたいな憎たらしさ。本当にすぐ友人のように罵声を浴びせれるぐらい慣れ親しめた。できれば慣れ親しみたくなかったよ。

きっと今の俺は、物凄く露骨に嫌そうな顔でテオを見ているはずだが……テオは何とも思ってないとばかり、ズンズンと俺に近づき、襟首を掴んで持ち上げる。そのまま、保健室のドアに向かって歩き始める。
「え?ちょ、なッなにすんだよ!どっか行くのか?!」
「どこかに行くのか?だと。ハッハッハッハァ!面白いこと聞くではないぞ少年!本当は分かっておるのだろう?」
「・・・」
ごめんなさい、マジで全然わかんないです。
とか言ったら酷い目に遭いそうなので黙っておく。
「ふっふっふぅ、やはり口では何とでも言えるが、内に宿る本心は偽れぬな少年!ヤル気満々の良い顔をしておるぞ!稽古を付ける我々もその方が遠慮なくやれると言うものよ!」
勝手に納得して勝手にヤル気に満溢れるテオ。
・・・ん?今、稽古とか言ったか?
＊ガラッ＊
思考に耽っている間に保健室の扉が開けられてしまった。
「なあなあ、一つ聞きたいんだけど」
「ぬ?なんだ?」
「稽古、やるんだよな?昨日みたいな」
「そうだが?少年がヤル気なので昨日よりハードにするがな!」
「マジか……ってそんなことが聞きたいんじゃなくて!今日も修業すんの!?」
「当たり前であろう?一日ばかり厳しい訓練をしたところで力が付くわけが無かろう」
・・・俺、死んだ。
「さあ!行くぞ!こうしている間にも時間は過ぎて行くのだ!待ってくれぬのだ!待ってくれるのは、吾輩の少年に対する想(愛)いだけだ!」
テオは俺を担いだまま廊下に出ると、走る構えを作り深呼吸をする。
「むぅんはっ!」

変な掛け声がスタートの合図を送る。
走る、豪快に。走る、爽快に。走る、筋肉の宴の前座のような時間。
「むぅわっはははははははは!!」
気持ちいほどに清々しい笑い声。
「あばばばばばばばばばばばばば!」
気持ち悪いほどに現実逃避の奇声。
正反対の二つの声が、不思議なユニゾンを奏で、廊下に響き渡る。
響き渡ったその声を聞いた生徒達は、一週間ほどその声を忘れられなかったそうだ。

二人が出ていった静かな保健室。
そこにある、転校生が寝ていたのとは別のベット。それを囲むようにカーテンが閉められ、一つの静かなプライベート空間を作っていた。
そこのベットの枕元近くに設置してあるテーブルで何やら難しそうな書類を書いている一人の女性。　右目は眠そうなタレ目、髪は手入れが去れていないのかボサボサっとしており、健康的な褐色肌が所々で見え隠れ、全身に包帯、白衣。
この、おかしな格好をしている彼女こそ、学園の保健室の主、マミ・マシロ。種族マミー。愛称まっちゃんだ。
「んッ、う～ん……あ?」
突如響く声。声はそこのベットから聞こえており、もぞもぞと何かが動いていた。ベットで寝ていた誰か起きたようだ。
それを確認したまっちゃんは難しそうな書類を裏向きに伏せ、ベットの方に向くと目を覚ました子に声を掛ける。
「起きた?大丈夫?気分どう?」
「へぇ?あ、まっちゃん先生……私、保健室にいるんだ」
ベットで寝ていた人物は、転校生と一緒に運ばれてきたココアだった。
寝起きの彼女は、まだ覚醒してない頭でここにまで至った経緯を考

える。
確か自分は教室にいて、ニーナちゃん達と話していたはず。そこに転校生君が来て、愚痴り始めて・・・？
「・・・」
焦点の定まらない目で明後日の方向をぼーっと見ている。時折、頭に付いている黒毛の猫耳がピコピコと揺れる。見ていてスゴく和む。
しかし、ココアの表情はどこか不安げだ。右左とキョロキョロと周りを見だし、揺れていた猫耳もへにゃんと垂れ始める。
そんな状態続いていると、次第に今にも泣き出しそうな、弱々しいものになっていく。すると、
「大丈夫？大丈夫。心配いらない」
隣から優しい声が掛けられた。
「まっちゃん先生……」
「大丈夫。――――は強い子。安心して」
聞き慣れない名前。だけど、ココアはその言葉さっきから聞きたかった。だから聞けて安心した。
「うん」
最後に朗らかに笑うと、再びベットへと潜り寝始めた。
「・・・」
まっちゃんは寝ているココアを毛布の上から母親のようにポンポン叩くと、その場から離れ、再び書類に目を通し始めた。が、すぐに片を置き、深い溜め息を吐いて天井に首を向けた。
「神騎（しんき）ちゃん。ホントに迷惑さん。こっちは大変」
その小さな独り言を聞いたものは誰もいない。

テオに拉致された。
と言う訳で連れてこられたのは学園の裏庭。
広いのに人がいない。とても使い勝手のいいシークレットスポットだ。
そりゃこんな変人ばかりが集まる場所だからな。ここに来ない人達がいったて変であるとか、損をしてるとかではない。むしろ正解で

す。
そして、俺はその変人の仲間だよ笑えねぇ！
「……シクシク」
あれ可笑しいな？何だか景色が滲んで前が見えないや。頬も濡れてるし。俺病気かな？ハハ♪
そんな俺の気持ち、状況も知らないで近くで四人ほどの人達が話合いをしてます。
「では順番決めはくじ引きで不満はないな？」
そのくじ入っているであろう箱を持っているのは、学園最高位生徒【六芒星の将】の一人。
羅皇紫電（らおうしでん）。種族：麒麟。特徴：和風ガチホモ。
「じゃあ私から引くわね♪」
ルンルンと楽しそうにくじ引き箱に手を突っ込んでいるのが、魔眼を両目に宿す悪魔。
アサギ・アカツキ。種族：サキュバス。特徴：眼帯ボイン。
「次は私だ」
アサギの次にくじを引くのは、巨大な槍を巧みに使いこなす魔物。
ライラ・ネオルド。種族：エルフとガイアドラゴンのハーフ（亜種）。特徴：強面に古傷、第三の目。
「次は吾輩だな、ゆくぞッ！」
ハイテンションでくじを引くのは、紫電と同じく六芒星の一人。更にガチホモ。
テオ・レオナルド。種族：人間？特徴：金色の肌の筋肉ダルマ、お洒落髭、服装はブーメランパンツのみ。
・・・なんだこれ？
端から見れば皆が皆、そう呟くに違いない。そりゃこんな連中の集まりですもの。誰だってそう思います、俺だってそう思います。
「決まったぞ少年！」
おや？もう決まってしまったのか？ゆっくり思考に耽っている時間もくれないのか。
俺は乾いた笑顔で紫電に顔を向ける。

「おや？どうしたのだ、疲れたような顔をして」
「まぁ、精神的に、ね？疲れてるよ」
「そうか。だが、稽古は手を抜かんぞ！」
チッ、無理か。
最後のあがきとばかりに体調不良っぽく振る舞って、楽なミニューにして貰おうと思ったが、うまくはいかないな。
「では早速、始めるとしよう」
「・・・はぁ、オッケー。やってやろうじゃん！」
ここまで来たら腹を括る。何もしなけりゃ俺なんて、簡単に蹴散らされてしまうだろう。
それだけは嫌だ。
「ではまず、アサギ殿の稽古からだ」
その言葉を合図にアサギが俺に歩み寄ってくる。
「よろしく、ね♪」
「おう」
さて、頑張りますか。

今の俺に必要なのはエロスじゃなくて癒しなの

「うぉおおおお！なんじゃこりゃあああ!?」
　学園の裏庭。すっかり修行の場と馴染んでしまったこの場所で俺は吠えた。
「ほらッ集中力切らすと感電するよ！」
「ふぉおおおおおおおおお!!」
　現在、アサギの指導のもとで『魔法』の修行しています。
　両足を逃げられないように鎖で繋がれおり、両手には謎の物体に繋がっているコード?を握り締めさせられている。
　このコードに魔力決まった量注ぎ続けないと電撃魔法が体中を駆け巡ると言う、拷問道具を思わせる特徴している道具を使っています。
「幾ら強い魔法を沢山覚えても、燃料である魔力量が少なかったら数回使ってすぐにぶっ倒れちゃうの！そんなの意味のないことだわ！これはその魔力量を増やす修行のなの！実践はまだよ！」
　そう言って何食わぬ顔で拷問物体をいじくるアサギ。
「じゃあ出力上げるわよ～、今より気合いれなさ～い」
「はぁっ!?ちょッおま！」
「そ～れッ」
「みぎゃあああああああああああ!!」
　1秒ももたずに電撃の餌食になった。
　俺が情けないんじゃない。アサギの情けが無さすぎるだけだ。

「これぐらい、ねッ！」
「うぐっ、これは、キツいッ！」
　今度はちゃんと丁寧に調整された出力で修行中。
　キツ過ぎず、カル過ぎずの極致。想像以上に難しい。
「う～ん、暇ね～」
「仕方ないでしょ、俺の修行なんだから」
「よし、ならお話しましょ」

「俺集中したいんだけど」
「それぐらいの魔力コントロール、話ながらでもできなきゃ話になんないわよ」
魔法の仕組みのまの字も知らない俺にそこまで求めるかこいつは。
「まあ私の話を聞いてるだけでいいから。私の過去よ」
「・・・」
かなり気になる話題でした。
どうしよッ、適当に聞き流す気だったのに、やるにやれねーよ！
俺の心の葛藤など知らずに、アサギは大人びた表情で語り始めた。
「私ね、本当はサキュバスと人間のハーフなんだ」
え？そうなの！っのッッッッ！ヤバイヤバイ！電撃に呑まれるところだった！
「おと――父親が人間。私は父親が嫌い。私の魔眼は父親の遺伝なの」
内容が支離滅裂していて頭の中で頑張って整理する。が無理！しようとすると俺が感電する！
その後もアサギの話は続く。それを俺が理解できた範囲で教える。
まず、アサギはサキュバスの母親と人間の父親から生まれた子供です。
父親が魔眼を持っていて、母親もチャームと言う眼を使う魅了魔法を使いこなすサキュバスだったから、特殊な遺伝で特別な魔眼を宿したと思われるらしい。
んで、それなりに平穏な生活をしていたんだけど、父親が凄腕の傭兵だったそうだ。しかも、戦い好きの。
家庭では優しい父親だったけど仕事では魔眼を巧みに使い、鬼神の如く敵を殺していったと言う。
アサギは父親の嫌いな顔ができ、家庭で父親とのコミュニケーションがぎこちなくなっていったそうだ。
アサギは父親に傭兵の仕事を辞めてほしいと頼んだが、聞いてもらえなかった。
そのまま時は過ぎていきある事件が起きた。

父親が仕事に行っていた家に父親を仇と言う人物が訪れたのだ。
母親が殺された。
アサギの目の前で、アサギを守りながら。
この事を予感していたのか母親が殺されてすぐに父親が帰ってきて、そいつを殺した。
その時の光景が今でも心を苦しめる。
紅く染まり床に突っ伏す母親。
残忍に切り刻まれた誰かもわからない死体。
そして、全ての原因である父親の……狂気に満ちた笑顔。
全部紅く。怖い。こんな所に居たくなかった。
そう思ったアサギは家出した。そして辿り着いたのが『グラディス』、パンデモの近くにある大きな街だ。
体力的にも精神的にも限界だったアサギはそこで一人の女性に助けられたらしい。しかし、その女性は名を名乗らなかった。代わりにアサギに衣食住を与え、去っていった。
そんな女性をアサギは『神様』と呼んで今もしたっている。
神様は去り際にこう言ったそうだ。
「アサギ、あんたに上げた衣服はこの世界ではお目にかかれない物だ。つまり、珍しいんだよ。もし、それと同じ様な素材の服を着たバカ面で黒髪の如何にも童貞そうな男が訪れたらそいつが私に代わってあんたを幸せにしてくれるよ。それじゃ、また会えたら恩返ししなさいよ。楽しみにしてるわ♪」
はい、説明終わり。
アサギの過去もなぜ俺を運命の人と言うのかもわかった。
なるどね。
おい、神様。あんたがどうも他人に思えないんだよねぇ。でも誰だ？
「こら！考え事してる暇あるなら集中！」
アサギが出力を上げる。
折角慣れ始めたのに、また気合いの入った声を張り上げるはめになった。

幸せに、か……。

そんなこんなで俺の修行は続きまして、決戦の日の前夜。修行から帰ってみると一枚の紙がドアに貼られてました。

『本日、点検のため９００～９２４号室の水道やらなんやら使えません。

ご協力お願いします。ｂｙ寮長』

「なん……だと……ッ!?」

俺は自分の部屋の前で阿保面で固まった。

いや、無理もないでしょ。俺はここ最近、修行漬けの一日で蓄積された疲労に耐えるためにお風呂を心の拠り所にしていたのにこの仕打ちだもの。俺の部屋で終わってるあたり作為的な悪意を感じる。神様は名指しで死ね！って言ってるのか？

しかし、どうしたものか……。風呂に入らないと言う選択肢はない。……あ、そう言えば。

俺は急いで部屋に入ると学園の冊子を手に取った。

「確かここに……あった！」

俺は目的を達成すると、冊子を置いて着替えを取りだしあるところへと向かった。

冊子はさっき見ていたページが開いたまま机の上に置かれており、そこにはこう書かれていた。

『大浴場』

ここは大浴場前。俺はそこで立ち止まってます。

銭湯とかの入り口でよく見かけるのれん眺めて見ると、

『♂』『♀』『混浴』

と書かれていた。

ここで俺がとれる選択肢は二つ。
男湯に入るか、混浴にはいるか。
まあ俺も男だから混浴に興味ないわけがない。でも明日は大切な日だし、なにより俺はエロスを求めてるんじゃなくて、癒しを求めてるんだよ。故にとる選択肢は……
「前者だな」
「何が前者なんだ？転校生」
聞きなれない男の声。
俺は反射的に声のする方へ振り向く。するとそこには、同じクラスの狼男がいた。
びっくりするくらい声が出ない。
今まで話し掛けて来なかった人が急に話し掛けてきたら当たり前の反応だと思うが、それがおきに召さない狼男さんは眉を寄せてこちらを見詰めてくる。
なんか喋らんとマズイ。
「いやなに、どっちに入る「お前顔怖いな！」…んだとゴラァ！」
なんなんだこの礼儀知らずな奴は！親しき仲にも礼儀ありと言う言葉があるだろうが！つまり、親しくない者なら更なる礼儀の極致を振る舞えってことだぞボケぇ！
心の中で毒づく俺。きっと表情にも出てるだろう。
そんな俺の気持ちも知らず、狼男は面白い物を見た風にケラケラ笑っている。
「なんだ、ちゃんと喋れるじゃねーか。俺はガイル・スロープだ、よろしく。で、転校生……お前は大浴場の前で何してたんだ？……本当に何してるんだ!?」
俺がしゃがんで曲げた右腕を水平に振るい続ける姿に驚いたようだ。ガイルって言ったらこれだろ？ソニックブーム！
さて、無視するのもあれなので。答えよう。
「大したことじゃないけど、男湯か混浴。どっちに入ろっかな～って考えてたたげ」
「ふ～ん、でどっちだ？」

「まあ、男湯かな」
「なんだよ……ちーせーなー？」
「今の俺に必要なのはエロスじゃなくて癒しなの」
「へいへい♪」
　ニヤニヤと口元を歪ませる。ギラリと輝く歯が姿を現れる。
　何だかんだで親しくなった。
　脱衣場で服を脱ぎながら、俺はガイルと話続けた。
「しかし、なんで俺なんかに話しかけてきたんだ？」
「まあ確かに最初は話しかける気なんて無かったよ。俺は元々喋らない方でね。本当にそんな気はこれっぽっちも無かったんだ」
「んじゃどうして？」
「遥って知ってるだろ？あいつ、俺の幼馴染みなんだよ。だからたまに、お前の話を聞かされてるんだよ。『他の人間達とはなにか違う雰囲気を持ってる優しい人だ』ってな。だから今日偶然見つけたお前に話しかけてみたって訳だ」
「へ～。遥、そんな風に思ってくれてたんだ」
　とてもいい話を聞いた。
　よくわからんチームのリーダーやらされてるが慕ってくれる奴がいると俄然ヤル気が出てくるな。
「まあ、俺が話し掛けたのは只の気まぐれさ」
　互いに服を脱ぎ終わり、浴場に向かう。中に入ろうと扉に手を掛け開ける。
「ムハハハハハハッ！中々の力！モチョス殿も腕を上げたな！」
「ムッシッシッシー！テオ様にそう言ってもらえて感激の極みであ～る！」
「ハッハッハッ！御二人、中々の名勝負であるぞ！」
　＊バタンッ＊
「・・・」
　なんか大浴場で見知った人達がレスリングみたいなのやってるんだけど。……入りたくねー！
「おいおい、どうしたんだ急に？」

いきなり扉を閉める俺に不満げな顔で聞いてきた。
「どうした?・じゃねーよ!!・お前こそなんで平気なの!?あんな地獄の最下層みたいな光景みてどうして平気でいられる!?俺は今すぐ目玉と脳をくり貫きたいのに!!」
「落ち着け!・あの人たちは目さえ合わせなければ狙ってこねーから」
「無理無理無理!・あんな体中が油だか汗だか何だかでテカテカ光沢放ってる物体を無視しろか無理だから!・鴉でもいたら一瞬で誘われて一瞬でポックリだよ!・」
俺は肺が空っぽになるまで必死に訴える。が、どうもことの深刻さをガイルは理解してない。
「俺、入るのやめるわ!・またなガイル!・」
すぐに体を布で隠し、急いで隣の混浴浴場に向かった。
「・・・あ～はいはいなるほどね～。なんやかんや言っても男ってことか?ええ?・」
ガイルは男湯の入り口を見詰めながらニヤニヤと笑いギラリと歯を剥き出す。
＊ガラガラ＊
「なにやら声がすると思えばガイル殿ではないかぁ!・」
「主も一汗流しに来たか」
「ご一緒させてもらいます、テオ様、紫電さん」
ガイルは二人を追うように浴場に入っていく。
熱気が帯びる白い湯気の中を進んでいくと、次第に大きくなっていく人々のざわめき。
ある所まで進むと湯気は晴れ、視界がクリアになっていく。すると、
「では、これから漢郷会議を始める」
タオルを腰に巻き、腰に手を当てて会議の開催を宣言するテオ様と、
『オオオオオオオオォォォォ!!』
それに呼応して、紫電さん含めた筋肉ダルマ達が大声で吠えた。
この学園には男子が圧倒的に少ない。ここにいるのはそんな一握

りの男子生徒達、全男子生徒の半数以上は居るだろう。
「では急いで会議を始める。皆は明日に決闘が催されるのをご存知であると思うぞ！今回の会議はその決闘を無事に進むことが出来るように、どう配慮するかを考えたい！」
テオ様が視線で合図を送る。
ガイルは前へ出て口を開く。
「情報屋のガイル・スロープだ。俺の掴んだ情報によると、共存反対派が明日の決闘に向けて何やら怪しい動きをしているらしい。確実かどうかは知らんが、用心に越したことはない。《戦皇女》のことだ、戦いを大事には思うが勝つために手段は選ばんかもしれない。気合いを入れてくれ」
俺はそれだけ言い終わると後ろへ下がる。
「うむ、ありがとう。では皆のもの！細かな予定を立てる！意見の有るものは…ッ！」
テオ様は腰に巻いてあるタオルを投げ捨てる。
「身体で語れぇぇ!!」
『うぉおおおおおおおおおおお!!』
次の瞬間、浴場の所々で男達が全裸で語り合いながら絡み合う（レスリング的意味で）光景に姿を変えた。
俺は端の方にある湯槽に浸かり、ゆっくりと息を吐く。全身に染み渡るような心地好さ、これだから風呂はいい。
「さて転校生。頑張れよ」
俺は目を瞑りながらポツリと呟いた。

嘘は……ありません

「おぉ、広い……」

俺は大浴場に入り、早速驚きの言葉を漏らす。

目の前に広がる、温泉のような内装に一瞬我を忘れ、惚れ惚れした。

風呂場を一杯に広がる湯気が少し視界を遮るが、それも大浴場の醍醐味と言うか、お約束と言うか、兎に角必要なものであって、俺は非常に満足だ。

運良く、この混浴風呂には誰も居なかった。

そう！俺はこの場で一人！つまり！好き放題に堪能できるはめはずし放題と言うのだ！最高じゃないか！

「にしても広いな～。お、露天風呂がある！ジャグジーにサウナ、電気風呂もあるのか！一般的な大浴場のレベルじゃないね、流石異世界♪」

たまに目にはいる奇っ怪な色をした、個人的にけっして風呂とは呼びたく無いものを無視して、俺はシャワーの前まで行って腰を下ろす。

「ホントに温泉みたいだなぁ」

よくみる温泉に似た光景に俺は懐かしさを覚える。

昔は良く、家族一同で温泉に行ったよ。……どうしてだろう。思い出そうとすると頭が痛い。

俺はさっさと、シャワーを浴びた。

そう言えば、人によって風呂の入り方が違うとか聞いたのを思い出した。ここの魔物達は一体どうやって風呂に入るんだ？スライムとかアンデットとか常に燃えてるやつとか。ヤバイ、気になる！

そんなこんなで、どの魔物がどんな洗い方するのか妄想しながら体を洗う。考え事をしてたせいか一瞬で終わった気がした。

さて、いよいよ……

「ヌフッん、風呂に入りますか♪」

と言うわけで、ちゃっちゃっと風呂に近付き片足を入れる。

じんわりと足から熱が伝わってき、俺の胸は歓喜で高まる。俺、か

なり風呂好きなんだ。
　我慢出来んとばかりに肩まで一気に浸かる。
「んッ、ふぅ～～～」
　あまりの気持ちよさに変な声まで出る。やっぱ風呂はええもんじゃ！
　体の疲れが染みでる様な感覚で癒される。その内、体が溶けて風呂の湯と馴染んでしまうんじゃないか、と言う気持ちになる。
「極楽♪極楽♪」
　爺臭い決まり文句を呟きながら俺は至高の時間を楽しんだ。
・
・・
・・・ｚｚＺ
「ッ！んばぁっ！」
　突如、液体が鼻と口から空気を奪っていく感覚に襲われる。
　急いで顔を上げて、酸素を確保する。
「はぁはぁ、なんつう危ないことしてんだよ俺は。危うく死ぬところだったぜ」
　あまりの心地好さに眠っていたようだ。危ない危ない、気持ち好さに負けて風呂で寝てしまうと最悪死ぬからな。気を付けないといけない。
　しかしこの湯、不思議だなぁ。かなりの時間、浸かっていた筈なのに全く逆上せる気がしない。
「魔法とかの効力かなぁ？」
「ワシの魔法式のお陰じゃよ」
「へ～すごいな魔法って。……お？」
　幻聴か現実か、今絶対聞きたくない声の正体を確かめようとそちらがわに顔を向ける。
「どうしたのじゃ、変な顔をして。ワシの顔に何かついておるのか？」
　深みのある、かわいらしい声の、幼い少女が、俺を見ながら、首を傾げて、何か言っております。
「いえ、別に、何も」

そう言って俺は顔を前に戻す。隣の少女は「変なやつじゃなぁ」と言いながら、俺と同じように前を向いた。
さて……どうしたもんかなぁぁぁ!?幼女と一緒に風呂に入ってるなんて状況、これ完全に犯罪じゃないですかぁ!?嫌々、ここ混浴だから犯罪にはならないよなぁ。……でも、御一緒してるのが幼女だもんなぁぁぁ！
このまま居たら、絶対に誰かに見つかって生きていけなくなる！てか、明日は大事な決闘だ。大事になるのことだけは絶体阻止せねば！
「ふぅ、そろそろ上がろうかな」
「ちょっと待つのじゃ」
逃げようとしたら、幼女に捕まっちゃった♪
何故逃がしてくれないんだ！と心で叫び、泣きたくなる衝動を押さえつけ、幼女に対応する。
「ど、どうしましたお嬢さん？」
「お主どうせ暫く暇じゃろ？ちょっとの間、ワシの話相手になってくれないかのぉ？」
「……断ったら？」
「新聞部にお主のことを混浴な事を良いことにワシの体を視姦するロリコン野郎と新聞部や連中に口コミするぞ♪」
どう転んでもバットエンドなので、まだ安全なお嬢ちゃんの話相手になる選択肢を選ぶ。
俺は再び湯船に身を沈める。
「聞き分けのよい子は好きじゃよ♪」
そう言ってこの子はニカッと笑った。憎たらしいが可愛いと思ってしまう笑顔だった。
「では、楽しくお喋りと行こうかのぅ。あ、ワシのことはシェリーちゃんと呼んでくれればよいぞぉ？」
「え？シェリーちゃん？」
「おお！そうじゃそうじゃ、そう呼べ♪」
やけに嬉しく反応するシェリーちゃん。
見た目相応の表情に俺は萌えた。

思うんだけど、ここの女の子達って素直なら皆可愛いよ。マジで。……仲良くできないかなぁ。
「で、話すって何を？」
「まあ、色々とな。お主が噂の転校生君じゃろ？決闘するそうじゃな」
「ああ、シェリーちゃんもご存じなんですね。そうなんですよね～、俺決闘するらしいんですよ……でも、俺って人間だし、よく思ってる奴も少ないし、何より弱いし……さっさと降参して、退学すれば丸く治まると思うんです、よ」
自分で言っていて情けなくなる。現実、俺は弱い。
アサギみたいにスゴイ魔法を使えるわけでも、ライラみたいに槍の達人でもない。ましてや、紫電のように奇妙な妖術やテオのような圧倒的身体能力に対抗できる術すら持ち合わせてない。
育った環境が違いすぎる。
「俺なんか……なにやっても意味ないんですよ」
「なるほどの～……。のうお前さん、今からするワシの質問に正直に答えてみ」
「え？……わかりました」
「よいよい。ではいくぞ？」
シェリーちゃんは笑顔を作り、楽しそうに質問を投げかけてきた。
「お主は明日の決闘、自分が勝てると思っておるか？」
「思ってるわけないじゃないですか」
「じゃあ、なにをすれば勝てると思う？」
「なにって……なんだろう。俺が勝てる勝負……」
「別に明日の対戦者のことは考えんでもよいぞ、友達とかワシとか相手は誰でもいいんじゃ。どんなルールなら勝てる？」
「んんーー？……料理とか？」
「ほう！料理とな！ええのええのう～♪他には？」
「他、か……他には～、工作も得意です。あと、走るのも。勝てるかどうか別として」
「一杯あるではないか。それだけ自信があれば決闘にも負けんじゃろうに。なにを弱気になっておるんじゃ？」

「聞いてました話!?決闘ですよ、こんな役に立たない特技あっても意味ないんですよ！」
「そんな大きな声出さんでも聞こえておるわバカもん！」
「なら……」
「ワシが伝えたいのは、戦闘技術だけが勝敗の全てを握っとる訳じゃないってことじゃ。テオや紫電が何を教えとるのか知らんが、お主の得意なことで戦えばいいんじゃよ」
「簡単に言いますけど、どうやって戦えと」
「ワシは奴等の決闘ルールをよく知っておる」
「え？」
シェリーちゃんの口から思わぬ言葉が飛び出した。
「あ～あ、それを教えてやろうと大浴場に足を運んでやったと言うのに……主がこんな根性なしじゃとわな～。無駄骨じゃったの」
そう言って彼女は風呂から出ていこうとする。
ここで呼び止めなきゃ！でも、決闘ルールを聞いたとして、勝てるとは限らない。そうだ、俺が勝てるわけがない。負けて、この学園を去る。最悪死ぬ。もし仮に勝ったとしても、俺がここにいる意味がない。……情けないな。
「・・・」
体の半分は浴槽から出ているのに呼び止められない。無駄と理解しているなら、何故未練がましくシェリーちゃんを目で追っているんだ。
あるんだ。こんな場面を昔。誰かが俺に背中を向けて何処かに行ってったことが。その時、俺は後悔した。一緒についていく選択肢もあったはずなのに。それを選ばなかったから。
今と同じように、俺にはできないと決め付け諦めきっていたから。
「ぁ、まっ待ってくれ！」
言った。遂に言ってしまった。
シェリーちゃんは此方を振り返る。その目から放たれる冷たい氷の様な視線に俺は固まってしまう。
それでも、体を潰してでも、喋らなきゃならない。

「俺は……勝てる自信がない。でも、だからって黙って負けたくない！さっきまで都合のいいこと言ってたけど、勝てる可能性があるなら、勝ちたい！だから、協力してくれ！いや、協力してください！お願いします！勝てる可能性を上げるために！」
「……本当に勝手じゃのう。ただの出任せなら止めとくとよいぞ」
「違います！勝ちたいんです！」
「もう、引き返さんか？後悔せんか？意地はって無理しとらんな？」
「はい！」
「嘘、じゃったら殺すが……よいか？」
　瞬間、シェリーちゃんから放たれる殺気。俺は今までの感じたことのない恐怖にかられる。今までの味わった悪寒より強い殺気に、今すぐ、自殺してでも逃げたくなる。
「嘘は……ありません」
　声が震える。でも、告げるんだ。もう逃げない。
「そうか。では最後に一つ質問じゃ。なぜ今になって覚悟を決めたのじゃ？さっきまであんなに弱気じゃったのに」
「わかんないですけど。今になってここに居たいって。誰とも別れたくないって。さっき、俺がいなくなっても誰も悲しまないとか言ったけど、そんなことなくて！いてほしくなかったら、最初っから協力なんて、仲良くなんてしてくれるはずがないし！そもそも全部自分が決め付けただけで！そんなことなくても、思われてなくても俺が皆と一緒に居たいってだけで！いや、ちょっと待ってください！今俺、喋ってること無茶苦茶ですよね？ちゃんと整理して話すんで……」
「もうよい！」
　大声を出して俺の声を遮るシェリーちゃん。
　俺はビビってそれ以上話すことはできなくなった。
　完全に見放された。そう思った時、シェリーちゃんの口から出た言葉は意外な言葉だった。
「言いたいことはなんとなくじゃがわかった。今回だけ特ッッッ別にッ!!教えてやるわい」
「え!?」

今、教えてくれるって……？
「一度しか言わんからな。よいか、シュラんとこの奴等が好む決闘ルールはなんでもありのバトルロワイアルじゃ。勝ち負けはどちらかが戦闘不能になるか降参するかで決まる。お主が勝つには後者の降参を狙うしかないじゃろ。どうするかは自分で考えるんじゃ、なんでもありのバトルロワイアルなんじゃからな。戦闘区域は恐らく学園全体じゃろ。教えることは以上じゃ、後は知ったこっちゃない。ま、せいぜい生き残ることじゃ」
そう言ってシェリーちゃんはサウナ室へ向かっていく。
「あ、ありがとうございましたぁ!!!」
「はいはい。また会うことがあったら、今度はゆっくり話をしようのう」
そう言って彼女はサウナ室へ入っていった。
この後の俺の行動は早かった。もう迷いはないから。
風呂から出て急いで自室へ戻る。机に陣取り、棚から持ってきたファイルの中にある紙を取り出す。
『荷物転送申請書』
俺は実家から送ってもらう物を殴るよう書き綴った。

「ふぅ～、疲れたの～……いや～弄り概のあるやつじゃなぁ、あやつは。ちょっと挑発しただけで、あそこまでムキにならんでもよいのにのぅ。くくくっ愛らしいのう。……独り言が多くなると歳を感じてしまうわい……身体は成長せんのに……」
サウナ室にいたシェリーちゃん。
汗が滴る童子のような身体を揉むようになで回す。主に胸を。
「ぐぬぬ……」
「なにを自分の胸を見つめて唸っている？シェリルよ」
「!?」
成長しない胸に絶望していた為、部屋に入ってくる気配に気付けな

かった。
声に反応して反射的に顔を上げた。そして、視界に入ってくる声の主。
シェリーちゃん――シェリルはその人物を見て一気に不機嫌になる。
「誰かと思えばシュラではないか？どうしたんじゃ急に……お主には自室の悪趣味な浴場があるじゃろうに」
「別にアタシがデザインしたわけじゃない。あんなに宝石を飾ってどうこうなるもんじゃないのにさ。それに比べて、ここはスッキリしていていい」
シェリルが憎み口を叩く相手は褐色肌の美しい女性だった。スタイルもよく、出るとこ絞まるとこスッキリしている。ただ、普通の女性のような筋肉の付け方をしておらず、細いボディービルダーと言う印象を受ける。
そして何より特徴的なのは、彼女の腕である。彼女の腕は常人の二本より四本多い六本あるのだ。
彼女の名前はシュラ。六芒星の一人だ。
シュラはゆっくりとシェリルに近づき、隣に座る。
「ふぅ……」
シュラが一息つく。
そこからは静寂の世界だった。
サウナの熱気、互いの呼吸音、たまに聞こえる雫が落ちる音。それら以外は感じない。
いつまで続いたか。遂に静寂は打ち破られた。
「何か……ワシに話したいことでもあるのかのう？」
「そうだね～……キミは聞き手に回るのが得意だったと覚えているが……どうかな？」
「ふんっ、話し手方が好きじゃがな。……あやつのことか？」
「わかってるじゃないか。その彼に情報を与えたどうかが聞きたい。与えたならキミは中立としてアタシにも情報を提供するべきだと思うけどどうだい？六芒星のシェリル？」

「ワシは中立としてあやつに情報を提供したまでよ。アマチュアとプロの決闘じゃからの。それにそこまで身は詰まってないわい」
「そうかい」
「お主、今度は何を仕掛ける気じゃ？」
「アタシは別に。皆が勝手にやるだけだからね。それに、彼のバックが対策を興じているらしい」
「その通りである！」
凄まじい声量と共にサウナ室の扉は開かれる。
入ってきたのは、金色の筋肉ダルマのナイスガイ、テオであった。
テオはズシンズシンと歩き、シェリルの隣を陣取る。
「ふんぬぅーーー。シュラよ、貴様のいいようにはさせんぞ」
「あああぁん？アタシがやってるんじゃないって言わなかったかい？」
二人は互いに殺気をぶつけ合う。その迫力は一般人なら裸で土下座して命乞いをすると思わせるほど濃厚で突き刺さるような空間を作り出す。
「お主ら！ワシを挟んで睨み合うではない！息が詰まるわ！」
そんな居心地悪い空間を作り出している張本人に文句を言うシェリル。
テオとシュラは互いに睨みながらも殺気を抑える。
学園最強の六人の内の三人が鎮座するサウナ室。
今この時、世界で一番混沌としたこの空間は、妙な緊張感の中、誰かがここのドアを開けるまで続いた。

何処にでもある家のリビング。
だらしない格好の女性がお腹をボリボリと掻きながら電話に出ていた。
「申請書は届いたよ。まったく家のバカ息子は何を考えてるのやら……え？そんなことになってんの!?やだなにそれ！面白そうじゃない！あ、録画しといてよ！お願～い♪……お！やった！ありがとう！

今度、なんか奢るわ。じゃあねー♪」
女性は電話を切ると階段を上っていった。
「んじゃ早速、あいつの部屋を物色しますか……」

決闘の火蓋

今日の学園はいつもと違った。
落ち着きがない。誰もがそわそわして、何かを待っていた。
今、午後1時。多くの人が次々と時間を確認しては、まだか…と言いたげな顔をする。
みんな、待っているのだ。決闘の時を。
この学園は血の気の多い生徒ばかりで決闘なんて珍しいものじゃないけど、今回は違うのだ。
人間と魔物。
その対戦カードは今までない組み合わせだった。
人間は魔物より弱いと言う事実から、こんなことはあり得ない。
あったとしても、人間が降参するか自主退学するのだ。
だからあり得ない。
だから、みんな心待ちにしている。
今回の人間は逃げなかったから。心が強かったから。
「大丈夫かな……、転校生君」
私――ココアは少し遅めの昼食を食べながら呟いた。
彼が逃げないことはなんとなくわかっていた。だって彼は強いから。
冷たいな目を向けられても、陰口を耳にはさんでも、彼は学園に居続けた。
それだけじゃなく、彼は他人と関わり、笑顔にした。私も笑顔にしてもらった一人。
だから、今度は私が支えるんだ！友達だから！
ココアは勢いよく立ち上がり、食事トレイを片付けて南館に向かった。
彼女をよく知る人物なら彼女の顔の変化に気が付いたであろう。
いつもの朗らかな表情ではなく、戦士のように凛々しい顔つきになっていたことに。

場所は南館。
南館は簡単に言えば体育館のような構造で、ステージとその向かい側の2階に広いスペースがある。
時刻は午後3時の少し前。
もうすぐ、決闘の時。
「・・・」
エルフの少女、ナチルは何時もと同じ無表情で南館の中央に立っていた。まるで、石の彫刻のようだ。
しかし、彼女の気迫は鎖に繋がれた猛獣の如く荒々しく圧縮され奮えている。
彼女は楽しみにしているのだ。これから始まる戦いを。
彼女は最初、『弱い人間』を『戦いの素人』と同意義に捉えて対戦相手を馬鹿にしており、同時に落胆していた。
そのような心境で、今回の決闘は楽しめそうにないとがっかりしていた彼女に嬉しい朗報が入る。
人間が『テオ・レオナルド』『羅皇紫電』『ライラ・ネオルド』『アサギ・アカツキ』以上の四名の指導を受け、戦いに臨む準備をしている。
これを聞き、恋する乙女の如く体が熱くなった。
あそこで戦うことが叶わなかった三人と確かな実力確かめることができた一人から指導を受けたとなれば、人間と言えどかなりの実力を身につけているはず。
そう予感した彼女は残りの日数を修練だけに費やした。
最高の状態で戦うために。
そして今、楽しみで楽しみで堪らない。
焦らされ興奮がおさまらない。
——早く、戦いたいッ！
彼女は顔に笑顔を浮かび、体が震えた。

南館2階。

細い通路には密集した見物者が、まだかまだかと決闘の開始を待っていた。
そんな中、２階唯一広いスペースには五つの椅子と五人の生徒がずっしりと腰を下ろしていた。
龍と馬を合わせたような顔で和服を着た妖しい雰囲気を漂わせる男。『羅皇紫電』
金色の肌に鋼のような筋肉。髪形はモヒカン。ネクタイとパンツのみを身に付けた巨漢。『テオ・レオナルド』
面積が極端に少ない衣服と山羊の骸を被っており、その表情から年相応の無邪気さと年相応ではない残虐性を伺える、どこか年老いた雰囲気を纏っている幼女。『シェリル』
女性らしい美しい褐色肌と鍛え上げられ、引き締まった力強い筋肉が見るものを魅了する。腕が六本それぞれに黄金で作られた装飾品を多く身に付けており、まるで戦の神と思う神々しい女性。『シュラ』
小柄な体。美しい金髪。病的に白い肌。頭より大きな帽子を被り、貴族の子どものような服に身を包む少年。『ロキ・クォーツ』
以上五名。
彼らこそ、この学園のトップである生徒『六芒星の将』。通称、六芒星である。
六芒星とは、この学園最強と言う意味の称号である。その証拠に彼らの周りから生徒が離れて、窮屈な二階に無理矢理スペースを作っており、彼らに決闘をよくみてもらう為の無意識の配慮がなされている。
正確には全員が離れている訳ではない。
一番左に座る男、紫電とその隣の席に座る巨漢、テオの周りでキャッキャッと騒ぐに数名。反対側の右端の席の少年、ロキの後ろに立って周りを警戒して気を張っている三人の女子生徒。彼らが六芒星と親密な関係であると周りの生徒は言わずとも察することができるだろう。
一触即発とも言える空気の中で自分のペースを貫き通す、テオの周りで騒ぐ生徒。その中の一人、ニーナがテオに質問をした。

「ねえねえテオ様。アニキ……大丈夫っすよね？」
停学をくらっても笑っていられるほどお気楽な彼女でも、今回の決闘には不安を隠せない。いつもの明るいトーンの声ではなかった。
そんな彼女の心情を知ってか知らずか、気遣いなどない真剣な声色ではっきりと答える。
「どうであろうな。少年が勝てる確率を上げるために、我輩も色々と仕込んだが、最後は少年の心が勝敗を分けるであろう」
「わからないってことっすね」
「フーハッハッハッ!!全くもって、耳が痛いぞ！」
豪快に笑うテオ。それに構うことなくニーナは別の人にも質問をぶつける。
「皆はどう思うっすか？アニキ、大丈夫っすよね？」
「大丈夫でしょう。少年は中々に芯が強いからねぇ」
と紫電が言う。曖昧な物言いの割には自信に満ちている声だ。
「お兄さんは僕らのリーダーだよ？負けるわけないよ」
尻尾を力なく垂らして答える遥。その声は震えている。
「最悪……にぃが死んだら、私……死霊術でなんとかする」
いつもの調子でホロンが言う。楽しみなのかそわそわしている。
「負けたらおしおきよ」
「いや、そこは優しく慰めるべきと思うけど」
いつもとは違って真面目な表情でナチルを見詰めるアサギ。彼女の言葉に反対意見を述べるライラ。
「大丈夫だよ、ニーナちゃん」
隣にいたココアがニーナに言う。いつもとは違う空気を纏うココアにニーナは戸惑う。
ココアは言葉を紡ぎ続ける。
「なんでかわからないけど、わかるんだ。転校生君は大丈夫だって。だから、心配なんてやめて、応援しようよ♪」
「ココアちゃん……」
どうしてわかるの？と問いただしたかったが、ニーナは言葉を飲み込み、胸にとどめた。これだけ自信に満ちた表情で言い切ったのだか

ら、これ以上聞くのは野暮だと思ったのだ。ニーナは南館の中央に視線を戻した。もう、その顔に不安の色はない。

「…………来た」

　ナチルの呟く一言に反応したのか、それまで騒がしかったギャラリー達が一瞬にして静まり返った。同時に南館の扉がゆっくりと開いた。そこから現れる人影、彼の登場だ。

「転校生……ッ!」

　彼は何時も着ている私服ではなく、胸ポケットが幾つも付いているタクティカルベスト。その下に黒色のセーター。ズボンは丈夫さと動きやすさを兼ね備えた、この世界にはない素材を使ったもの。その姿はさながら特殊部隊の隊員のようだった。

　彼はゆっくりと進みナチルの前へと立つ。

「またせたな」

「ええ、本当に。てっきり逃げたのかと思いました」

「アホか。準備だ準備」

「それは一体?」

「お前を倒す為の準備だよ。わかりきってんだろ?」

「なるほど。それは、楽しみですね……♪」

　語尾が最後だけ弾む。はやく戦いたくて仕方がないみたいだ。口の端も少し上がって冷たく微笑んでいる。

　睨み合う二人の緊張感が南館全体に広がり、ここもまた一触即発の空気となった。そんな中、南館に女の子の声がメガホンで拡声されたように響き渡った。

「みな様ーーーー!!大変長らくお待たせいたしました!!遂に、戦士が集いましたので、決闘の開始を宣言させてもらいます!!」

『おおおおおおおおおお!!!』

　鼓膜が割れほどの歓声。耳が痛い。

　声の主である白い翼を背中に生やした女の子が二人の側に降り立

つ。頭に輪っかもあるのでエンジェルとわかる。
　エンジェルは手に持っている淡く発光する石を当てながら話を続けた。どうやら、その石がメガホンの代わりのようだ。
「え～まず、二人にはこれから決闘を行ってもらいます。勝敗はどちらかが戦闘不能になるか、負けを認めるかで決めます。その他は大体何をやってもオッケーなので存分に暴れちゃってください。血肉が舞うような戦いを期待してます！」
　このエンジェル、血の気が濃いな。
　ルールはシェリーちゃんに聞いた通りだ。大丈夫、できる。
「では、さっさと始めますね。ほらほら距離取って！もう私もみんなも焦らされて興奮が半端じゃないんですから！」
　鼻息を荒くして早く事を進めようとするエンジェル。他人事だと思って気楽なことで。
　言われるままに距離を取り、向き合う。ナチルの目線が俺をじっと捉えているのが嫌でもわかる。
「それでは始めるぞお前らあああ!!」
『おぉおおおおおおおおおおおお!!!!』
「良いですかお二人とも。私がこの水晶を投げますので、地面に落ちた瞬間を開始とします。いいですね？」
「ああ」
「こっちもだ」
「はい！では両者の確認が取れたとこで……いきます！」
　瞬間、ナチルはさっと剣を抜いて構える。対する俺は少し遅れて自分の武器を構える。すると、周りからどよめきが聞こえる。
「なんだあの武器？」「見たことのない形をしている」「本当に武器か？」「ブラフかもな」「ナチル！気を付けろ！」
　――――戦いは始まる前から始まってるんだよ。
　彼が持っている武器は彼の世界での主流の武器『銃』である。それは、この世界では全く認知されていない未知の代物であった。
　彼の狙いは未知の武器を相手にする警戒心と恐怖心を煽っていき少しでも勘を鈍らせることである。

「……それが貴方の武器ですか？」
「ああ。銃ってんだよ。見るのは初めてか？」
「噂なら聞いたことがあります。が、聞いた物とは違う形状ですね」
「まあ、そりゃそうだ。なぜなら、これは異世界の技術によって作られた武器だからな！」
「ッ!?」
　俺はこの場所にいる全員に伝えるつもりで、声を張り上げる。
「いいか！俺は異世界の技術の結晶を駆使してお前を倒す！お前は手も足も出ず地面に膝をつき、敗北するだろう！ヒャッハーーー!!」
　周りからは怒号やら歓声などが飛び交い、よりいっそう騒がしくなる。
「バカ言ってんじゃねーぞ人間！」「ふざけんなよ！」「ナチル、やっちまえぇ!!」「アニキ、頑張るっすよ！」「少年！脱ぐのだ！脱ぐのだ！生尻だ！」
　最後は聞かなかったことにする。
　そこに、半切れのエンジェルが割り込んできた。
「ああもう！いい加減に始めますよ！いつまで待たせるきですか!?」
「あ、すんません」
「はいはい、わかればいいんですよ。それでは……ゴホン、魔物と人間の意地を賭けた勝負！第なんちゃら回目、パンデモ主催決闘……」
　会場が静まり返り、水晶を突きだす。
「始め!!」
　言葉と同時に水晶は放り投げられ、遂に戦いの火蓋は切られた。

人間と魔物の戦いは遥か昔から人間が勝つってことを教えてやる

放り上げられた水晶が地面に落ちて砕け散る。同時に俺は素早くバックステップし、銃の引き金を引いてプラスチックの弾を発射する。

銃が本物だと思った？残念、母親特製改造モデルガンでした。

銃口から放たれた無数のプラスチック製の弾がナチルを襲う。

ナチルはそれを素早く剣で弾き落とす。驚異の動体視力。しかし、全ての弾を防ぐは流石に困難。頬や腕に何発か弾がか。

「くっ！」

激痛。一体どういう原理で小さな弾がこれほどの威力を持つことができるのか……ナチルにはわからない。わからない以上、はやく武器を無力化するべきだと考えた。

が、そこまでの間に彼は次の手をうっていた。

＊コロコロコロ＊

床に転がる何個かの球体。瞬間、球体から勢いよく噴き出す濃い白煙。一瞬にして視界が奪われたことに驚き、ナチルの思考が止まる。

その間も彼は動く。

敵の武器の発射音に反応してナチルは我に帰り、すぐに防御に移る。受けきり、攻撃へ転じようとするが、攻撃された方向に気配すでにない。音で居場所を探ろうとしても全く音がしない。

彼は特殊な靴で足音を消していた。

色んな所から球体が床に落ちる音と煙の噴射音が聞こえ、ナチルは完全に敵の姿を確認できなくなる。

――――クソ、完全に出遅れた！

心の中で悔しがっていると、銃声が響いた。

次こそはと意気込み何発かは攻撃を食らう覚悟へ銃声のする方に走り出す。次の瞬間、別方向から銃声。そして、弾丸の雨。

それに反応したナチルは片足を軸に回転しながら、剣を大きく振る

い、弾を弾き落とす。
息つく暇もなく、更に別方向から銃声。しかし、さっきから鳴り響く銃声。弾が飛んできた方向からも銃声。
「な、何が起こっている……ッくぅ！」
次々と増える銃声。ナチルは自分を中心に喧しく響き続ける銃声に気を取られ、先程より弾を防ぐことができないでいた。
このままでは狙いの的になるだけだと判断し、できるだけ音を消してその場を走り去った。
ナチルが逃げた先は南館の隅。ここなら、攻撃される方向を最大限に減らすことができると判断したからだ。
次に彼女は大声で叫んだ。
「二階で観戦なさっている皆さん！今すぐ窓を開けて換気してください！」
珍しく発せられた彼女の大声に二階で悠々としていた生徒たちは急いで窓を開ける。すると、館内中を白く染めていた煙が窓を通り、外へ出ていく。
ナチルは笑った。
――さあ、これで煙幕はすぐに消え、貴方は姿を隠すことができなくなります。私が移動したことにも気付かないようで、攻撃される気配がありません。どういう原理で四方から音が聞こえるのか分かりませんが、所詮は撹乱のための偽物。脅威にはなりません。
ナチルは息を殺して身を潜める。剣に手を掛け、いつ敵の姿を捉えても、すぐに斬れるようにする。
煙が少しずつ薄れていくなか、ナチルはさっきまで満たされていた感覚が嘘のように冷め始めていくのを感じていた。
焦らしに焦らされ、煽りに煽られた闘争心が戦いの終わりを悟り始めたのだ。
ナチルは体が重くなった気がした。まるで、敵を斬ることに躊躇しているようだ。今までこんなことはなかった。それほど、この戦いに期待をしていたのだ。
ナチルは戦いの果てに自分が知らない何かが得られると期待を寄

せていた。
まだ終わらないでくれ、と無意識に願うがその時は訪れる。
煙の多くが外に逃がされると、その場の状況を知ることができた。
「な、なんだと!?」
ナチルは驚愕した。いまだに鳴り響く銃声がしきりなしに騒いでいると言うのに、本物が……転校生の姿がそこになかった。代わりに、今だに鳴り響く銃声の正体はわかった。
「これは……?」
偽の銃声を出していたのは小型のラジカセ。会場のあちこちにばらまかれリピート再生されていた。
「姑息な手をッ!」
ナチルは怒鳴り、ラジカセを壊す。
明らかに怒りに満ちた者の行動だが、彼女は笑っていた。
笑顔、笑顔、笑顔。顔が緩み、口の端は釣り上がる。
――まだ戦える!
「どこだ!出でこい!隠れて次の手を準備しているのでしょう?受けてたちます!さあ、かかってきなさい!さあ!」
ナチルの素敵な戦いは終わらない。
・
・・
・・・
「遅くないですか!?」
ナチルの間抜けな声。会場のどよめき。
司会のエンジェルの声が響く。
「え〜、煙幕もなくなって時間が随分と経っていますが……何故か人間が出てきませんね……どうなってるんでしょ?」
観客が思っているだろうことを代弁するエンジェル。その答えを持つ人物が南館の出入口から入ってきた。
「失礼するよ」
その者はガイル・スロープ。遥の従兄であるワーウルフだ。
「なんの用ですか?忙しいので後にしていただけません?」

冷静を取り繕うナチルだが、その声色は怒りが見えて取れる。口では選択をさせて貰える風に言うが、明らかに邪魔だと表している。
しかし、ガイルは気することなく自分の用件を述べる。
「急ぎなんでね。今言わせてもらう。転校生からの伝言なんでな」
「なに!?」
転校生からの伝言、と聞いてナチルの態度は一変してガイルに早く話せと急かすようになった。
その様子に苦笑しているガイルには司会のエンジェルから拡声器の石を渡される。
咳払いを一つすると、ガイルは伝言を会場中に言った。
「バァァァァァァァカ!!」
突然の罵倒。しかも、やけに声が転校生に似ている。
あまりの出来事にナチルはポカンとした表情で固まってしまう。
ガイルは気にするとなく続ける。
「へいへい、ナチルちゃんよ〜。お前まだ南館ですか〜?俺はそこからとっくに出てっていって校舎の中ですよぉ?あー!もしかして、俺が律儀に正面から正々堂々向かって行くと思ったのかなぁ?残念ったー!俺はそんなことできる力もないし、なによりそんな度胸なんてありましぇん!!あれですか?やっぱりバトルジャンキーなナチルさんはまんまと俺の逃走策に嵌まってくれると思ったよ〜。ナチルパイセンあざーッス!まじチョロかったっすよ!ケケケケッ!ねぇねえ、今どんな気持ち?今どんな気持ち?校舎に隠れてるから教えにきてちょ♪待ってるよ〜♪……以上だ」
会場中に伝わったこれでもかと言う挑発的な伝言。ナチルだけに向けられた言葉であるのに、観客の多くが「うぜぇ」「イラッときたぜ」など、怒りの言葉を漏らしていた。
しかし、そんな中で突如聞こえる笑い声。
六芒星の五人の内、四人が大笑い。
「少年ッ、それは……それはないぞ、プクッこ、これではあまりにナチルが可哀想ではないか……クッククククク!」
「フーハハハハハハハハ!あれだけ吾輩が己の肉体で戦う術を享受

し、鍛え上げてやったと言うのに。まさか別の戦いの道を選ぶとは！やはり、若い果実の成長を見るのは面白い！」
「あひゃひゃひゃひゃ！ダメじゃダメじゃ！は、腹が！捩れる！千切れる！ふぅふぅ、小僧め、悩んだ末の選択がそれか！ヒヒヒヒヒッ！」
「アハハハハ、人間のボウヤがなにをするか見物だったが、まさかあれだけ啖呵切っておいて、逃げるなんてねぇ。なかなか面白いじゃないか。まったく、雄としてのプライドはないないのかい？……いや、決闘の場でこれだけのことをしたんだから、ある意味では大物かもしれないねぇ」
「なにが面白いんだか……僕にはジジババの壺がわからないや」
大物達の爆笑。そうそう見れるものではない光景に見物人達の意識はそっちに向いていた。故にナチルの目の前にいるガイル以外、気付いていないのだ。
ナチルが今までにない憤怒の形相になっていることに。
「ぶち殺す!!」
「っとと！」
ナチルはガイルを横に押し飛ばすと扉を抜けて校舎に向かった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふぅ……生きた心地がしなかった～」
俺は寮にある自分の部屋で一休みをしていた。
冷静沈着の戦闘マニアであるナチルを倒すには作戦が必要だ。しかし、その作戦を失敗へと導く要因はただ一つ。
ナチルの培っている経験による冷静な思考力。
だから、この作戦の第一段回目はナチルを煽って怒らせ、常に落ち着いた情態にさせないこと。
確実に望ましい展開になるように。
ただ、これには問題がある。怒ると言うことは加減ができないと言うこと。そんな状態のナチルを相手にするのは非常にマズイ。
「ま、最初からいつ死んでもおかしくないんだし、やるしかないんだよ

なぁ」
息を整え終えた俺は腰を上げ、そこらにあったものをリュックやポケットにいれる。
「人間と魔物の戦いは遥か昔から人間が勝つってことを教えてやる」
リュックを背負い、扉を勢い開ける。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「え～皆様、映像班がナチル選手を捉えるまで間の時間を拝借したいと思います。
さあ！遂に始まりましたナチルＶＳ人間の決闘。戦いは優勢だと思われた人間が突如姿を消して、ナチル選手がそれを追っていると言う状況です。
申し遅れました！司会はわたくし、天使のヴィクトリカでございます。そして急遽！このかたに解説をしてもらうことになりました！」
「うぬ。解説はワシ、シェリルことシェリーちゃんじゃ！よろしく頼むぞ♪」
「いや～♪こんな大物を解説に司会ができるなんて、司会者冥利につきます！」
「まあまあ。今回は互いに対等な立場。司会者と解説者なんじゃから、楽に仲良くゆこうぞ」
「はい！では、さっそく……シェリルさん。ずばり、この試合どちらの勝利で幕を閉じると思いますか？」
「ほほう……思いきりのよい質問じゃな。そうじゃなぁ、ワシはずばり、人間の小僧が勝つと思おとる」
「わお！まさかまさかの答え！そ、それはどうしてでしょうか？」
「奴はな、ワシのお気に入りなのじゃ」
「ええ!!?」
「ほっほっほ、驚くのはまだ早いぞ。奴は紫電とテオのお気に入りでもあるんじゃよ」
「あ、それは割りと有名ですよ。新聞とかで伝わってると思います」

「なんじゃつまらんの。まあ良い。ワシの話の種はまだまだあるからのぉ」

この後、映像班がナチルを見つけるまでの間、シェリルの一人話が長々と続いたそうだ。